

研究紀要



第 34 号

序	校長 新納 雅樹 (2)
平成 29 年度県総合教育センター研究提携報告—全体まとめ—及び各科の報告	(3)
音楽科 2 年生研修旅行報告(音楽科)	音楽科 2 年担任 立石 純也 (39)
普通科 2 年修学旅行報告	2 学年引率者 田原 辰也 (43)
美術科 2 年生研修旅行報告(美術科)	美術科 2 年担任 前村 卓巨 (51)
美術科 1 年風景画合宿報告	美術科担当者 餅原 宣久 (59)
英語コース語学研修実施報告	英語科担当者 内山 健一 (61)
平成 29 年度校内研究授業・研究発表の記録	(65)

平成 29 年度

鹿児島県立松陽高等学校

はじめに

校長 新納雅樹

次期学習指導要領が平成30年度から幼稚園、32年度から小学校、33年度から中学校、34年度から高校と全面実施になります。今回の改訂の基本方針は、グローバル化の進展や人工知能(AI)の飛躍的な進化など、社会の加速度的な変化を受け止め、将来の予測が難しい社会の中でも、伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を子どもたち一人一人に確実に育む学校教育を実現することとなっています。そのためにこれまでの改訂の中心であった「何を学ぶか」という指導内容の見直しに加えて、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の視点から学習指導要領を改善しました。社会において自立的に生きるために必要な「生きる力」を育むという理念のさらなる具現化を図るために、学校教育を通じて身に付けるべき資質・能力として次のような三つの柱を明確化しました。

- ① 生きて働く「知識・技能」の習得
- ② 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養

これらを実現するための方法として「アクティブ・ラーニング」の視点で授業改善をすることにより、学びの本質として重要となる「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことの大切さを説いています。

また、現在、高大接続入試改革が進む中、高等学校には大きな変革の波が押し寄せています。2020年度から始まる「大学入試共通テスト」では、これまでの知識や技能だけでは解答できない「思考力」、「判断力」、「表現力」を問う記述式問題が国語や数学で出題されたり、グローバル化に対応するため、英語では「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」の4技能を評価するため、2023年度までは民間試験と共通テストの併用、その後は民間試験を活用することになりました。また、各大学の入試では、高校から提出された調査書の内容を重視することになり、特に高校時代の様々な活動を評価することになりました。生徒の学習活動の成果等を形にして残すことが重要となってきます。我々は、どのような方法で形に残すかに早急に取り組まなければなりません。

今回、平成29年度の研究紀要を発刊することになりました。内容は教育センター研究提携報告、音楽科や美術科2年生の研修旅行報告、普通科2年生の修学旅行報告、美術科1年生の風景画合宿報告、英語コース語学研修実施報告、平成29年度校内研究授業・研究発表の記録など、一年間のそれぞれの職員の研究成果がにじみでています。我々は教員である以上は、生徒の指導のために日々是研鑽しかありません。この紀要は研鑽の賜物といってもよいと思います。今後、この紀要がアクティブラーニングの研究発表の場にもなれたらと考えます。最後に、執筆された先生方並びに、編集にあたられた先生方に感謝申し上げます。

多くの皆様にお読みいただき、ご指導ご助言をいただきますようお願い申し上げます、発刊にあたっての挨拶とします。

鹿児島県総合教育センター提携研究
平成 27 年度～平成 29 年度 研究報告（3 年間のまとめ）

I 研究主題

思考力・判断力・表現力の効果的な育成を目指した授業改善
—アクティブ・ラーニングの実践を通して—

II 研究主題設定の理由

1 学習指導要領の趣旨から

学習指導要領の取組を推進する中で、「生きる力」の育成，とりわけ「確かな学力」の要素である基礎的・基本的な知識の習得とその活用を図り，思考力・判断力・表現力を育成することは喫緊の課題である。

2 平成 26 年度までの研究課題から

思考力・判断力・表現力の育成は，平成 26 年度までの基礎的・基本的な知識や技能の習得に関する研究を更に発展させて行うことのできる研究内容であり，授業改善を通じてその具体化を図れるものである。また，生徒が主体的・能動的に学ぶ姿勢を涵養することは，これまでの研究で明らかになった本校の課題である。

3 研究推進の立場から

アクティブ・ラーニングはこれまで大学等で取組が進んでいる学習・教授法の一つだが，近年中等教育での取組も関心が高まっている。

「アクティブ・ラーニング」とは教員の一方的な講義形式とは異なり，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。発見学習・問題解決学習・体験学習等が含まれ，教室内でのグループワークなども有効なアクティブ・ラーニングの方法。（平成 24 年 8 月中央教育審議会答申）

III 研究の構想

1 研究期間

平成 27 年度～平成 29 年度（3 年間）

2 研究内容概略

- (1) アクティブ・ラーニングについての調査研究
- (2) いくつかの単元や分野を取り上げた，本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の検討
- (3) 課題発見や課題解決を促す問いや活動の検討
- (4) 学んだことを定着させるための，効果的な振り返り活動の検討
- (5) 思考力・判断力・表現力の効果的な育成のための教材やワークシートの開発
- (6) 言語活動等を充実させ，協働的な学びを取り入れた学習活動の検討
- (7) (1)～(6)の各教科における検証，次年度への継続

3 3 年間の研究計画

年度	主な内容
平成 27 年度	<ul style="list-style-type: none">・ アクティブ・ラーニングについての調査研究（全国での取組の調査と本校での実態調査）を行い，本校職員へ情報提供を行う。・ 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力について検討する。・ アクティブ・ラーニングを実験的に導入し，内容の検証を行う。・ 研究内容に基づいた授業を公開し，実践事例や研究内容を発表する。
平成 28 年度	<ul style="list-style-type: none">・ 1 年目の研究を基に，研究内容を具体的に精査し，更なる授業改善を図る。・ 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力について検討する。・ アクティブ・ラーニングの実践事例を整理し，本校職員間で共有する。・ 研究内容に基づいた授業を公開し，実践事例や研究内容を発表する。
平成 29 年度	<ul style="list-style-type: none">・ 研究成果について検証し，研究のまとめを行う。・ 研究内容に基づいた実践授業を公開し，実践事例や研究内容を発表する。

4 研究の体制

校務分掌上では、教務部の研究開発係が総合教育センターと提携しながら研究を行う。係は世話係2名と各教科1名（保健体育・家庭・情報科を除く）の9名からなる。研究の体制は、研究開発係が教務部、進路指導部、各種委員会の学力向上対策委員会、各教科と連携を図りながら研究を進めていく（図1）。

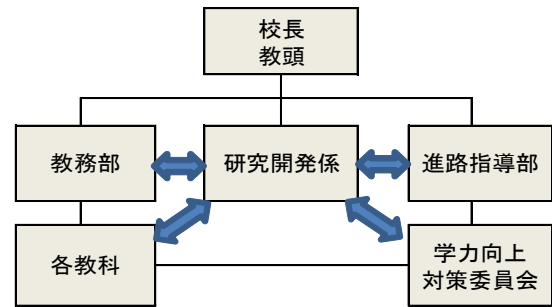


図1 研究体制

5 研究提携における教科研究概要について

(1) 3年間の各教科研究テーマ一覧

国語	思考力・判断力・表現力の効果的な育成を目指す国語科指導法の研究 —アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通して—
地理歴史 公民	思考力・判断力・表現力を育成する授業実践の研究 —課題解決学習を通して—
数学	アクティブ・ラーニング型授業による数学的な思考力・表現力の育成に関する研究
理科	科学的な思考力・判断力・表現力を育成する授業改善 —課題解決的な観察、実験を通して—
音楽	アクティブ・ラーニングを取り入れた音楽科学習指導法の研究 —思考を活性化する学習形態の工夫—
美術	アクティブ・ラーニングを取り入れた美術科学習指導法の研究 —表現及び鑑賞の学習に言語表現を取り入れた学習形態の工夫—
外国語	Expressing ideas through reading and listening actively

(2) 本研究1年目（平成27年度）教科研究の概要一覧

国語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒が習得すべき思考力・判断力・表現力の明確化 ○ アクティブ・ラーニングについての調査研究 ○ アクティブ・ラーニングの導入
地理歴史 公民	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題解決学習の基礎的な研究 ○ 本校の生徒に適する授業や評価の方法についての検討
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本校の授業実践の振り返りによる、アクティブ・ラーニング型授業の実態調査 ○ 県内外のアクティブ・ラーニングの研修視察、または先行研究の第一人者による研修 ○ 本校におけるアクティブ・ラーニング実践方法の検討と、授業における実験的導入
理科	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の検討 ○ これまでの指導を基にした研究計画の作成 ○ アクティブ・ラーニングを取り入れた観察、実験の導入
音楽	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の現状を踏まえた研究課題の調査と分析 ○ アクティブ・ラーニングについての調査研究
美術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の現状を踏まえた研究課題の調査と分析 ○ アクティブ・ラーニングについての調査研究及び検証授業の実施
外国語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 到達度を測るための技能統合型ライティングテストの開発と、その実施による実態調査 ○ 評価規準の設定と単元目標に応じたアクティブ・ラーニングの実験的導入 ○ 学習段階に応じたライティングの到達目標の検討

(3) 本研究2年目（平成28年度）教科研究の概要一覧

国語	<ul style="list-style-type: none">○ 思考力・判断力・表現力の評価規準の再検討○ 単元目標に応じたアクティブ・ラーニングの実践○ 思考力・判断力・表現力の評価と授業改善
地理歴史 公民	<ul style="list-style-type: none">○ 課題解決学習を取り入れた授業の実践と評価の工夫○ 生徒の学習に対する意識調査の実施と結果の分析○ 課題解決学習の授業による思考力・判断力・表現力の向上についての検証
数学	<ul style="list-style-type: none">○ 習熟度別編成クラスにおけるAL型授業の実践及びその効果、課題の明確化○ リフレクションの在り方の研究
理科	<ul style="list-style-type: none">○ 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の吟味○ 1年目の研究成果の検討、授業方法の改善○ アクティブ・ラーニングを取り入れた問題発見や課題解決を促す観察、実験の検討・実践
音楽	<ul style="list-style-type: none">○ 主体的・協働的な活動を取り入れた授業実践○ 能動的な学習場面設定と実践的な指導法についての研究
美術	<ul style="list-style-type: none">○ 題材や生徒の学習状況に合わせたアクティブ・ラーニングの研究○ 造形的要素や思いを言語化することや学習形態についての調査研究
外国語	<ul style="list-style-type: none">○ 技能統合型およびアクティブ・ラーニングの要素を取り入れた授業実践○ 読んだり聞いたりしたことをもとに書く力を効果的に育成する指導法の検討

(4) 本研究3年目（平成29年度）教科研究の概要一覧

国語	<ul style="list-style-type: none">○ 単元目標に応じたアクティブ・ラーニングの実践○ 思考力・判断力・表現力の評価と授業改善○ 研究の成果と課題のまとめ
地理歴史 公民	<ul style="list-style-type: none">○ 思考力・判断力・表現力を育成する課題解決学習の方法と評価の研究○ 本研究における課題解決学習の成果と課題のまとめ
数学	<ul style="list-style-type: none">○ アクティブ・ラーニング型授業による数学的な思考力・判断力・表現力の育成についての実証的な研究○ 数学的な思考力・判断力・表現力の評価方法の研究○ 研究のまとめ
理科	<ul style="list-style-type: none">○ 課題解決を促すアクティブ・ラーニングの実践と授業改善○ 研究成果の分析とまとめ
音楽	<ul style="list-style-type: none">○ アクティブ・ラーニングの実践と授業改善○ 3年間の研究のまとめ
美術	<ul style="list-style-type: none">○ 言語表現を取り入れ学習形態を工夫した授業の実践及び生徒の変容のまとめ○ アクティブ・ラーニングを取り入れた美術科学習指導法の研究のまとめ
外国語	<ul style="list-style-type: none">○ 3年間の技能統合型テストの結果による研究成果の検証○ 学習段階に応じたライティングの到達目標の設定および目標達成のための指導法の共有○ 本校生徒に効果的であったアクティブ・ラーニングのまとめ

IV 本研究の内容と成果・課題

1 本校の現状と実態についての把握・分析

(1) 生徒の生活面や進路に対する意識について

ア 普通科は文科コース・体育コース・書道コース・英語コース・理科コースに分かれており、また普通科の他に音楽科・美術科がある。このような学校の特性上、部活動が盛んであり、85%の生徒が部活動に所属している。JR通学生が多く、北薩や始良方面からの遠距離通学生も多い。部活動や遠距離通学以外にも様々な原因が考えられるが、生徒は概して自宅で過ごす時間が短く、十分な宅習時間の確保が厳しい。

イ 進路希望調査によると、生徒の進路希望は四年制大学・短期大学・専門学校・公務員などであるが、四年制大学への進路希望者が毎年全体の6割程度であり、生徒の多くは大学進学を目指している。

(2) 生徒の学習全般に対する意識（平成27～29年度 全校生徒を対象としたアンケート結果分析）

ア 3年間の「学習全般（学習への取り組む姿勢等）」について、自己を振り返る調査結果から、どの学年においても8割以上の生徒が、現在の学習が将来につながるという意識をもっていることが分かった。しかし学年が進むにつれ、高校生活への慣れからか学習に対する意識が低くなり、学ぶ意義を感じにくくなっている。一方、「学ぶことは楽しい」と回答している生徒は2学年で減り、3学年で増えている。1・2学年次において、いかに学ぶ喜びを感じさせるか、また、その学びが将来につながるという意識をどのようにしてもたせるのか、ということは本校の大きな課題であると言える。

イ 学習に関する調査内容は、「授業中や、授業後考えたり行動したりすること（思考力）」について自己を振り返るものであった。また、アメリカのミネソタ大学におけるアクティブ・ラーニングの規準を参考にして、表現活動に関して5項目の質問も同時に行った。

その結果、学習内容について「なぜ～なのだろう」と考え、授業で分からない点は友達や周りの人に聞く姿勢は身に付いている生徒は多いことがわかった。しかし「習ったことを、授業の最後に振り返って確認する」活動や、「学んだ内容に関係することを、自宅や図書館等で調べる」とはしていないと感じているようだ。特に学年間での目立った相違点はなかった。

以下に「自分によくあてはまる・あてはまる」と答えた生徒が8割以上と4割未満の項目を抜粋した。学習した内容を自分の言葉で説明させたり、振り返りの機会を設けたりする取組を進めていきたい。

「よくあてはまる・あてはまる」と答えた生徒の割合が <u>8割以上</u> の質問事項	「よくあてはまる・あてはまる」と答えた生徒の割合が <u>4割未満</u> の質問事項
学習内容について「なぜ～なのだろう」と考える	習ったことを、授業の最後に振り返って確認する
授業で分からない点は、友達や先生など周りの人に聞く	学んだことを定着させるため、授業のポイントを他の生徒に説明する
今学ぶことは、自分の将来のために必要だと思う	学んだことを定着させるため、授業の最後に、学んだことを使って教え合う
出された問題や課題の答えを見出そうとしながら、授業を受ける	学んだ内容に関係することを、自宅や図書館等で調べる

ウ 「教室でのグループワーク」なども有効なアクティブ・ラーニングの方法」と定義されているため、ペア・グループ活動に関する調査も行った。数々の協同学習（cooperative learning）に関する研究を行っている Johnson, Johnson & Smith(1991)が挙げている、よい協同学習の五つの要素を基に5項目の質問用紙を作成した。その項目を右に掲載する。すべての項目において7割以上の生徒が「あては

協同学習の五つの要素	質問項目
肯定的相互依存	ペア・グループ活動をすれば、学んだことを理解しやすい
促進的相互交流	ペア・グループ活動では、お互い助け合ったり教え合ったりする
個人と集団の責任	ペア・グループ活動では、自分の役割や責任を果たそうとする
集団作業スキルの発達	ペア・グループ活動がうまくいくように、相手の発言をしっかり聞き、自分の意見や考えも表現できる
グループの改善手続き	ペアやグループで協力すれば、少し難しい課題にも挑戦できる

まる」と答えており、ペア・グループ活動を肯定的に受け止めていることが分かった。一方、個人で学習を進めることを好む生徒、人とのコミュニケーションをとるのが苦手な生徒も3割ほど見られる。「このような手順で話せば相手に伝わりやすい」といった表現の型やヒントを与えてから表現活動をさせるなど、教師の配慮と手立てが必要である。

(3) 本校生徒の現状把握および分析のまとめ

生徒の多くは協働的な学習を好ましいものと捉えている。今後継続して授業改善を実施したい。また、本校で取組を進める際には、生徒のコミュニケーションスキルを向上させ、協働学習が促進するように配慮したり、学習課題を明示し、その解決に向かってきめ細やかな支援をしたりすることが必要であると考えられる。

2 アクティブ・ラーニングについての調査研究

(1) 先進校視察から（平成28年9月、福岡県立北筑高等学校、福岡県立折尾高等学校、広島市立美鈴が丘高等学校、広島県立安芸高等学校）

- ア 授業にアクティブ・ラーニングを取り入れるに当たって、その目的を事前に説明する機会を設けることは、生徒の不安感を解消するとともに、学習効果を上げることにもつながる。
- イ A3サイズの磁石付きホワイトボード、プロジェクターとスクリーンを、各教室あるいは各棟に常設しておくとし、利便性が高い。授業前後の教具の持ち運びがないことで、一段と気軽に使用できる。
- ウ ICEループリック（評価指標）の作成と活用により、単元ごとの評価指標設定や、考査問題作成の改善を進めることができる。（ICE＝I：基礎知識、C：知識間のつながり、E：知の応用）
- エ 評価において、教師からの評価に加えて、生徒自身の評価やグループ内の相互評価を生かす方法がある。生徒が提出する課題にも自己評価表を付けて、取組状況を振り返らせるという工夫も効果的である。
- オ 大学から講師を招いて研修会を行ったり、大学の授業を実際に参観したりという形で、職員全体でアクティブ・ラーニングについて研修を重ねることができる。校内・校外研修以外にも、日頃から教科内で気軽に意見交換・授業参観を行うなど、協力して授業改善に取り組む体制も重要である。

3 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の検討

(1) 身に付けさせたい思考力・判断力・表現力（各教科主なものを抜粋）

- ア 様々な考え方ができる事柄について、幅広い情報を基に自分の考えをまとめ、発表したり討論したりする。（国語）
- イ グループに分かれ、意見をまとめたり、発表したりする。（地理歴史・公民）
- ウ 自分の考えを、言葉や数、式、図、表、グラフなどの数学的な表現を用いて表す。（数学）
- エ 事象を考察し、導き出した考えを表現する。（理科）
- オ 学んだ理論や身に付けた技能を生かして楽曲分析を行い、演奏に反映する。（音楽）
- カ 自身や友人の作品について客観的に評価する能力を高め、良さや課題について説明することができる。（美術）
- キ 英文を読んで、その内容に対する自分の意見を、主語と動詞のある形の英語で書く。（外国語）

(2) 課題

他者と考えを深め合って、最終的に表現活動や言語活動において活用できるような思考力・判断力・表現力を求める教科が多い。また、社会の問題を多角的に捉えて、自分の問題として考える力も本校の生徒にとって必要な力だと考えていることが分かる。

本研究によって、3年間で生徒が習得すべき思考力・判断力・表現力を明確にし、教科や全職員で共有することができた。生徒の学力向上に向けて、教師が共通理解の上、指導していくことが重要であるため、このことは大きな成果であると考えられる。上記のような力を身に付けさせるには各学年でどのような指導を行えばよいかについて、引き続き、教師間の対話を欠かさないことが大切である。

4 課題発見や課題解決を促す問いや活動の検討（各教科主な実践を抜粋）

(1) 実践内容

- ア 初読段階の疑問点を、本文の表現を論拠にしながらグループ学習で解決する。（国語）
- イ 新聞記事等を活用し、事象の原因や影響等について考察する。（地理歴史・公民）
- ウ ペアあるいはグループで、自分の考えや疑問点を出し合いながら課題を解決する。（数学）
- エ グループごとに選んだ方法に合わせて道具を選び、遺伝子導入を示す手法を協議・演示する。（理科）
- オ 海外研修旅行の事前学習として、グループで調べたいことを研究し、まとめて発表する。（音楽）
- カ 制作の際に、課題と課題解決のための方法、最終的な成果物等を各自で設定する。（美術）

(2) 課題

「生徒に適切な着眼点を示しておくべきだった（国語）」、「生徒が知識を使い思考・判断する段階で、間違いがないかを確認していく必要がある（理科）」など、発見させたいレベルの課題に生徒を到達させ、適当な方法で課題を解決させるためには、発問の工夫や学習内容の観察が重要であることが分かった。ペア・グループ学習では、学習活動の経過を見計らって適宜助言を与えるだけでなく、他のグループの生徒と学習内容を確認し合わせるなどの工夫が考えられる。あくまで、生徒が自分たちの知識・経験を基に、主体的に課題発見・解決に取り組む姿勢を育てることが肝要である。指導法の研究や授業改善を継続していきたい。

5 学んだことを定着させるための、効果的な振り返り活動の検討（各教科主な実践を抜粋）

(1) 実践内容

- ア 授業において取り上げた時事問題を、テストなどの評価問題でも出題する。（地理歴史・公民）
- イ リフレクションカードを毎時間終了時に記入し、学習前後の自己の変容を可視化する。（数学）
- ウ 授業ごとに本時の目標、反省を各自記録して、制作に反映させる。（美術）
- エ 既習文法を使って英作文活動を行い、相互添削・暗唱・発表を行う。（外国語）

(2) 課題

「振り返りの必要性は十分に確認できたが、簡潔、継続的に行うことが必要であり、リフレクションシートの工夫や振り返りの時間設定に課題がある（数学）」など、日常の授業で継続して振り返りを促す学習活動を設定することの難しさが分かった。学習を通して理解できなかったことを記録することで、次時に向けて復習・予習をするようになるなど、振り返りの効果はやはり強く実感されている。記入させる内容を精選し、短い時間であっても振り返るような習慣を付けるべく、各教科で取り組みを広げたい。

6 思考力・判断力・表現力の効果的な育成のための教材やワークシートの検討（各教科主な実践を抜粋）

(1) 実践内容

- ア 時事問題について調べて、チーム対抗のディベートを実施する。（国語）
- イ 政治・経済で毎授業の始めに新聞記事やニュースを取り上げ、生徒がその問題に対して意見を発表する。（公民）
- ウ 火成岩の組成と分類に関する図を用いて、火成岩の分類を行うためにはどのような観点があるかを観察しながら検討し、まとめたものを文章化する。（理科）
- エ 具体的に想定した題材についてアイデアを出し、60語程度の英文でメールを書き、グループごとに発表する。（外国語）

(2) 課題

「生徒の学習意欲を高める課題設定や課題解決学習に有効な資料等の収集を継続する必要がある（地理歴史・公民）」など、生徒にとって「考えたい」という思いを強くする教材の選択に苦心する声が多く聞かれた。できるだけ身近で、実生活に即して取り組める一方で、解答の可能性が豊かな教材となる資料を今後も教科内外で共有していきたい。また、評価方法は本研究で完成に至らなかったため、引き続き検討を行い、より生徒の実態を把握して指導改善に活かせるようなものにしたい。

7 言語活動等を充実させ、協働的な学びを取り入れた学習活動の検討（各教科主な実践を抜粋）

(1) 実践内容

- ア 登場人物の心情について理解し、自分の意見を明確にする。グループ活動で他者の意見を知り、自分の意見を振り返る。（国語）
- イ 日本史Aの授業（日清・日露戦争）でクラスをグループに分け、関係する国ごとに意見をまとめたり、発表したりする。（地理歴史）
- ウ 授業の始めに、毎回アクティブ・ラーニングの意義（グループ学習の目標、留意点、大切なこと）を説明し、生徒に意識させた上で授業を行う。（数学）
- エ 話し合ったことを発表し合い、他のグループと自分たちの班の答えと照らし合わせて構造式を確認する。（理科）
- オ 油彩画における構想段階や制作過程において、グループ協議を行いながら構想をまとめ、基礎的技法や表現方法の習得を行う。（美術）
- カ 問題の答えについてペアで互いに説明し合う。（外国語）

(2) 課題

「個人の学習に主体性を持たせる工夫をして、協働学習が内容的に広がり、深まるようにしたい（国語）」、「生徒の授業に対する取組に温度差があるため、積極的に取り組めるような工夫が必要である（美術）」など、単にグループ活動をさせるだけでは学習効果を上げられていないことが分かった。共通した学習課題をもつ生徒同士でグループを構成するなど、生徒が協働的に学習しやすい環境づくりが考えられる。また、個人で考える時間をとるだけでなく、個人の学習自体に何らかの役割を持たせるといったアプローチもできるだろう。

8 本研究の成果と課題のまとめ

(1) 成果

- ア 各教科の特性を生かしながら、授業改善を全教科で行うことができた。思考力・判断力・表現力を効果的に育成する学習指導を検討・実践し、さらに学力の伸長を促す学習内容として、主体的・協働的な活動や課題解決学習を授業に取り入れるなど工夫した。また、必要に応じてICTや付箋紙など視覚的に分かりやすく示す教具を用い、授業内容の理解深化を図った。
- イ 本校生徒が卒業時まで習得すべき思考力・判断力・表現力について、教科内で共通認識することができた。また、生徒の学力や現在の学習内容を教科ごとに見直したり、分析したりすることで、教科内でこれまでの指導の在り方について検討する機会が増えた。
- ウ 各教科が研究しているテーマに基づく実践授業を毎年公開し、多くの先生に参観していただいた。授業改善につながる実践的な研究となった。

(2) 生徒の変容

- ア 学習状況調査（6月下旬実施）の結果によると、3年間で生徒の自宅学習時間（全校平均）は平日1日当たり約1.7倍、休日1日あたり1.9倍に増えている。また、学校評価に関するアンケートの結果からも、学習習慣の定着や学習法の改善に努める生徒が増えていることが分かっており、生徒の学力向上への意欲は高まっている。
- イ 3年間本研究の対象であった本校の3年生を取り上げ、前述した学習に関する調査を分析した。協同学習に関する項目など、初年度より7～8割以上の生徒が「よくあてはまる・あてはまる」と答えた項目については、大勢の生徒が取り組んでいた内容であったため、大幅な値の上昇は見られなかった。しかし、3年間で値の上昇が見られた項目もあり、それを以下に抜粋した。授業改善の結果、自分の考えや学習した内容について、筋道を立てて振り返り、論理的に考え、それを表現する力が身に付いてきたようだ。

学習に関する質問項目	「よく当てはまる・当てはまる」と答えた生徒の割合(%)		
	H27	H28	H29
自分の考えや学習した内容について、筋道を立てて振り返り、論理的に考える	41.8	44.8	47.8
新しく学習した内容を、自分の言葉で説明する	35.7	35.8	38.1
学んだことを定着させるため、授業のポイントを他の生徒に説明する	28.2	29.4	32.7
学んだことを定着させるため、授業の最後に、学んだことを使って教え合う	26.8	28.3	30.2
学んだことを他の分野や学習と関連づけ、より深く考える	38.2	41.9	48.5
学んだことをノートに適切にまとめたり、他者に伝わるよう発表できる	38.2	42.7	45.3

(3) 参加型学習に対する教員の意識について（本校教員を対象としたアンケート結果分析）

本校教員を対象にして、東京大学大学総合教育研究センターが行っている「高等学校における参加型学習に関する実態調査」を平成27年度より3年間実施した。

「参加型学習を取り入れた授業の実施によりあなたが実感した効果はありますか」の問いに対し、「生徒が他者と一緒に学ぶ楽しさを理解するようになった」、「生徒と教員間のコミュニケーションが深まってきた」と回答する教員が多く、教員が参加型学習の効果を実感していることが分かる。

一方、参加型学習を実施したことで生じた困難や課題、不安として、「授業の進度が遅くなる」「参加型学習になじめない生徒やついてこられない生徒がいる」、「授業前後の教員の負担が増加する」という回答は3年間を通じて多かった。

(4) 課題

ア 授業にアクティブ・ラーニングを取り入れるに当たって、生徒に対するオリエンテーションが不十分であったという反省が聞かれた。授業の目的を事前に説明して目的を明確にしたり、授業のルールを共通認識したりすることで、アクティブ・ラーニングによる学習効果をさらに高めていきたい。

イ 教具や設備が十分に整っていないことで、アクティブ・ラーニングを授業に取り入れづらい場面があった。講義室にスクリーンを常設しておくなど、授業のたびに機器を持ち運ぶ手間を省くように、環境整備を進めていきたい。

ウ アクティブ・ラーニングの学習活動や成果物を評価することについては、「評価する」、「評価するが成績には含めていない」という両方の立場において、その基準や方法を検討してきた。教科ごとに毎年使える汎用性の高い評価の方法等を工夫していきたい。

エ 教員に対するアンケート結果を受けて、参加型学習を取り入れる際には、教員の不安を解消するために、「授業準備に時間をかける」、「授業方法を工夫する」、「教員の他の事務的作業を軽減する」などの工夫が必要である。

オ 全校体制で生徒の進路実現に向け最善は尽くしているものの、生徒の進路希望を100%達成できる訳ではない。特に、4年制国公立大学を希望していた生徒の一部は、卒業後、大学受験のための浪人や、短期大学、看護・専門学校への進学といった進路選択をしている。今後とも授業改善を模索しながら継続し、生徒の一層の学力向上を図る努力を重ねていきたい。

国語科

1 3年間の研究テーマ

思考力・判断力・表現力の効果的な育成を目指す国語科指導法の研究
—アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通して—

2 研究テーマ設定の理由および研究の目的

本校国語科では平成 24～26 年度にかけて、必要な基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用を通じた表現力の向上に関する研究を進め、各学年における達成目標と、習得すべき事項を明確にした。しかし、基礎と基本の定着のための授業改善はできたが、表現力を向上するための単元構想や授業づくりの研究、評価の規準の設定までは至っていないということが課題として挙げられた。また、本校生徒の実態からは、授業に対して受け身で臨み、自ら課題を見つけて考察し、解決する能動的な態度が見られず、現行の学習指導要領で重視されている思考力・判断力・表現力が育成されていないのが現状である。

そこで、生徒が課題の発見と解決に向けて主体的かつ協働的に学ぶ学習であるアクティブ・ラーニングの視点を授業に取り入れることで、本校生徒の思考力・判断力・表現力を育成することを目的とし、テーマを設定した。

3 教科研究概要

- (1) 生徒が習得すべき思考力・判断力・表現力の明確化と評価規準の設定
- (2) 学年や単元に応じた目標の設定と、アクティブ・ラーニングを通じた指導法の研究
- (3) アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践と授業改善

4 教科における3年間の研究構想

1 年目	<p>【教科研究概要】</p> <ul style="list-style-type: none">○生徒が習得すべき思考力・判断力・表現力の明確化○アクティブ・ラーニングについての調査研究○アクティブ・ラーニングの導入 <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・本校生徒の実態に合わせた目標設定と、思考力・判断力・表現力の評価規準の検討・全国の国語科における先行研究等の収集・分析と本校での実態調査・各学年におけるアクティブ・ラーニングの導入
2 年目	<p>【教科研究概要】</p> <p>○アクティブ・ラーニングを通じた思考力・判断力・表現力を効果的に育むための、指導方法の研究と授業実践</p> <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・単元目標に応じたアクティブ・ラーニングの実践・思考力・判断力・表現力の評価と授業改善
3 年目	<p>【教科研究概要】</p> <ul style="list-style-type: none">○研究結果の検証○3年間の研究のまとめ <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・各学年における研究結果の検証・具体的な改善策に基づいた授業実践と評価・国語科で実践したアクティブ・ラーニングの成果と課題

(1) 1, 2年目の研究のまとめ

	教科研究概要	取り組んだ具体策	反省や課題
平成27年度	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が習得すべき思考力・判断力・表現力の明確化 アクティブ・ラーニングについての調査研究 アクティブ・ラーニングの導入 	<ul style="list-style-type: none"> 各学年による授業実践 (初読段階の疑問解決をめざしたグループ学習, グループ学習と発表及び質疑応答, 時事問題に関するチーム対抗のディベート) 【公開授業】 2学年 古典B「和歌」 	<ul style="list-style-type: none"> 自ら課題を見つけて考察し, 解決するための内的動機付けがうまくできていない。 どのように課題を提示して見通しを持たせるかが課題。
平成28年度	<ul style="list-style-type: none"> アクティブ・ラーニングを通じた思考力・判断力・表現力を効果的に育むための, 指導方法の研究と授業実践 	<ul style="list-style-type: none"> 各学年による授業実践 (個人活動の充実, 効果的なグループ活動を目指したテーマ設定, 相互評価のワークシート作成, 論拠を明確にした発表の仕方の指導など) 【公開授業】 1学年 国語総合 「『わらしべ長者』の経済学」 	<ul style="list-style-type: none"> 協働学習は概ね積極的だが, 自分の意見や根拠を持たない「他者依存型」も見られる。 思考力や表現力の育成に繋がるような課題設定やワークシートの工夫。 学年や教科内での評価規準の設定(共通理解)。

5 本年度の研究の実際

研究最終年として改めて生徒の実態を確認し, 3年時(卒業時)までに習得すべき思考力・判断力・表現力を明確化するとともに, それぞれの学年でアクティブ・ラーニングを導入した授業を実践・研究した。

(1) 生徒の実態

1学年	<ul style="list-style-type: none"> 基礎基本事項の理解, 定着度に差がある。 グループ学習やペア学習への取り組み状況において生徒に偏りが見られる。 文章を書く知識, 技術が身に付いておらず, 文意が通じる文章が書けない。
2学年	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な知識事項について, 積極的に身につけようと取り組んでいる。 他の人の意見を聞いたり, 自分の意見を話したりする態度は身につけている。 物事を深く考察し, 文章にして表現することについては苦手意識がある。
3学年	<ul style="list-style-type: none"> 授業態度は良好で, 落ち着いて学習に取り組み, 発表者の意見を傾聴する雰囲気はできている。 習得すべき知識の習得に積極的に取り組み, 板書事項等の理解に努めている様子が見られる。 成績の中・上位層の生徒の中には資料やデータを基に深い考察を見せる者もいるが, 的確に相手に伝わるように表現する力はまだ不足している。 本文の内容は大まかに把握できるが, 選択肢の中から合致しているものを判断する力に乏しい。

(2) 習得すべき思考力・判断力・表現力（各学年における重点項目）

1 学 年	読む こと	<p>文章を読んで、それに対する自分の考えをもつ力。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価する。（C読むこと エ） 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。（C読むこと ウ） 	<p>《表現活動》</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって交流する。 「自分」意識の向上
2 学 年	読む こと	<p>文章を読んで、根拠をもって自分の考えを整理する力。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章を批評することで、自分の考えを深めたり発展させたりする。（現代文B－指導事項ウ） 古典を読んで思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。（古典B－指導事項ウ） 話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりすること。（国語表現－指導事項ア） 	<p>《表現活動》</p> <ul style="list-style-type: none"> 人間の生き方や考え方について、本文中の表現を根拠にして自分の考えをまとめる。 課題を設定し、様々な資料を調べて成果を発表する。 「相手」意識の向上
3 学 年	話す こと ・ 聞く こと	<p>他者の意見を生かして、自分の考えを深める力。</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な表現についてその効果を吟味したり、書いた文章を互いに読み合って批評したりして、自分の表現や推敲に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。（国語表現－指導事項オ） 相手の立場や異なる考え方を尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合うこと。（国語表現－指導事項イ） 	<p>《表現活動》</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な考え方ができる事柄について、幅広い情報を基に自分の考えをまとめ、発表したり討論したりする。 「社会」意識の向上

(3) アクティブ・ラーニングを導入した授業実践

	科目・単元名	目標	内容
1 学 年	国語総合 ・漢文編詩文	文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。（C読むこと ウ）	漢詩が詠まれた背景や作者の境遇を含めてグループで読解することで、作品世界の理解を深め、人間や社会、自然などへの考え方を豊かにする。
2 学 年	国語表現	話題や題材に応じて情報を収集・分析し、自分の考えをまとめたり深めたりする。（指導事項ア）	資料を的確に読み取り、それに対する自分の意見を小論文にまとめる。
3 学 年	国語表現	<p>話題や題材に応じて情報を収集・分析し、自分の考えをまとめたり深めたりする。（指導事項ア）</p> <p>相手の立場や異なる考え方を尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合うこと。（指導事項イ）</p>	提示された時事問題について感想を述べ合い、指導者が提示した資料を読んだ上で話し合いを行う。書籍やインターネット等で各自調査を行い、再度ディスカッションを行い、グループ発表を行う。

(4) 授業実践の成果と課題

	実践例	○成果と●課題
1 学 年	・グループ活動で漢詩の作者の境遇や背景を調べ、口語訳を完成させる。	○分からないことを調べ合い、適切な口語訳を互いに検討するようになった。 ●活動に消極的な生徒のグループを活発に活動させ、課題をやり遂げさせる指導。
2 学 年	・自分の意見を考えた上で、反対する（相手）の意見も考える。	○生徒の意見に客観性の高まりが見られた。 ●相手の意見に影響され、自分の意見が変化する生徒がいた。
	・問題の是非に対して同意見者でグループ活動する。	○グループ員に同調・共感ができ、活発に取り組めた。 ●表層レベルの論拠にとどまり、思考を深めさせられなかった。 ●活発な活動を行い、意表を突く発言が出したグループでも、その内容を論述に反映させられなかった。
	・評論文を読んで感想文を書き、グループで相互評価する。	○テーマに対するものの見方を広げることができた。 ●評価の観点を具体的に示す必要があった。
	・評論文を読んでまとめの感想文を書き、初読時から考えがどのように深まったかを自己評価する。	○自分の考えが深まり、変容を比較できた。
	・詩を読んでグループでテーマについて話し合い、発表する。	●グループで発表し合った内容に大きな違いがなく、取り扱う題材選びに課題が残った。
3 学 年	・本文読解の前提となる歴史的イベントや人物の経歴の知識事項について、事前に班ごとに担当を決め、調査し、発表する。	○インターネットや日本史の資料集などを利用し、情報収集によく努めていた。 ○差が見られたのは、本文に照らし、読解に必要な情報を精査できていたかという点であった。 ●取得した情報を状況に応じて取捨選択し、伝える力の不足。
	・提示された時事問題について感想を述べ合い、その後指導者が提示した資料を読んだ上で話し合いを行う。書籍やインターネット等で各自調査を行い、再度ディスカッションに臨み、グループ発表を行う。	○社会問題に対する関心や資料の読み取りの程度が高い生徒が、積極的に話し合いを引っ張っていた。 ●活動に消極的な生徒を話し合いにいかに取り組ませるか。 ●ある程度の知識を持つことで全員が参加できるような工夫を、指導者側が事前に準備しておくこと。

(5) ワークシートの工夫について（2学年の取り組みについて）

上記「(4) 授業実践の成果と課題」の2学年の取り組みの中で、「グループ活動において活発な活動をし、発言内容もよいグループであっても、論述ではその内容を生かしてきれていない。」という課題が挙げられたが、ここでは2学年における活動を改めてまとめた。

実践	○成果と●課題
<ul style="list-style-type: none"> 構成メモを作る際に5段階構成の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ワークシートが「型」になっているため、書きやすさが増し、どのレベルの生徒も書くことができた。 ●「型」に則って書かせるため、ほとんどの生徒が同じような内容になってしまった。
<ul style="list-style-type: none"> 構成メモで5段階構成をする際、「問題提起→個人→グループ→全員」で共有 「相手の意見の容認→個人→グループ→全員」で共有 「自分の意見の理由根拠→個人→グループ→全員」で共有という形を繰り返し、全員で一つの小論文を完成させた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○段落ごとにまとめてから次に進む形が取れたため、理解が深まった。
<ul style="list-style-type: none"> 同じ論題に賛成派として小論文を書かせた後、反対派として再度小論文を完成させた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の意見とは反対の意見の小論文を書く場合論拠が弱く、説得力が弱い文になってしまった。

グループ活動をすることで、書こうとする意欲をもち、書く内容を発見することはどの生徒もできるようになった。しかし、話し合いや意見交換の場面では独創的で、聞いている誰もが納得する発言が多かったグループの生徒も、いざ論述するとなると、その内容が文章に反映されていないことが目立った。生徒は、「①話す→②まとめる→③書く」の①から②はうまくできるようになったが、②から③を行うことに大きなハードルを感じているようである。そこには、文章に表現する際の語彙力の低さ、「みんなでまとめた内容＝資料」をいかに活用するかという文章作成力の低さ等が根底にあると考えられる。アクティブ・ラーニングの活用を通して、身につけた知識や深まった思考をいかに活用する力をつけさせるかが課題として浮かび上がった。

ワークシート（例）

(1) 5段階構成メモ

問題	①	②	③	④
<p>「問題提起」</p> <p>「相手の意見の容認」</p> <p>「自分の意見の理由根拠」</p>	<p>「問題提起」</p> <p>「相手の意見の容認」</p> <p>「自分の意見の理由根拠」</p>	<p>「問題提起」</p> <p>「相手の意見の容認」</p> <p>「自分の意見の理由根拠」</p>	<p>「問題提起」</p> <p>「相手の意見の容認」</p> <p>「自分の意見の理由根拠」</p>	<p>「問題提起」</p> <p>「相手の意見の容認」</p> <p>「自分の意見の理由根拠」</p>

ワークシート
 レッスン3の資料を読みながら書く
 構成メモ（最終発表ページ）
 3年 組 第 1 学期
 年 月 日

(2) 5段階構成メモを基に小論文を作成

小学生に英語教育をすすめる意義について	二年	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	百
---------------------	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	---

6 3年間の「国語に関する意識調査」の結果のまとめ

平成 27 年度から取り組んできた今回の研究実践に伴い、生徒に「国語に関する意識調査」を毎年度 10 月に実施してきた。結果は以下のとおりである。

- ※ 調査対象：平成 27 年度 普通科 1 年生 2 学級
平成 28 年度 普通科 2 年生文系 1 学級，理系 1 学級
平成 29 年度 普通科 3 年生文系 1 学級，理系 1 学級
- ※ 単位はパーセント
- ※ 1：好きだ，2：きらいだ
3：普段の生活や社会生活の中で役に立つと思う，4：役に立つと思わない

質問事項	年度	1	2	3	4
(1) 人前でスピーチや説明をすること。	H27	22	78	97	3
	H28	17	83	100	0
	H29	23	77	99	1
(2) 人前で報告や発表などをすること。	H27	25	75	100	0
	H28	23	77	100	0
	H29	19	81	99	1
(3) ペアで話し合いや討論などをすること。	H27	77	23	96	4
	H28	83	17	87	12
	H29	77	23	99	1
(4) グループ (4~6 人) で話し合いや討論などをすること。	H27	75	25	96	4
	H28	85	15	95	4
	H29	70	30	99	1

(5) 学級全体で話し合いや討論などをする事。	H27	61	39	95	5
	H28	57	43	91	9
	H29	58	42	91	9
(6) 説明や意見などを文章に書く事。	H27	36	64	96	4
	H28	35	65	96	3
	H29	45	55	100	0
(7) 文章を読んで話し合う事。	H27	53	47	87	13
	H28	59	41	90	10
	H29	59	41	93	7
(8) 文学的な文章を読む事。	H27	64	36	86	14
	H28	46	53	78	22
	H29	52	48	85	15
(9) 科学的な文章を読む事。	H27	39	61	75	25
	H28	32	68	72	28
	H29	33	67	87	13
(10) 課題を探究してまとめて発表する事。	H27	29	71	92	8
	H28	24	76	94	6
	H29	38	62	99	1
(11) 自分で話したり書いたりしたものを自己評価したり、生徒同士で相互評価したりする事。	H27	45	55	89	11
	H28	41	59	86	13
	H29	49	51	93	7
(12) 関心をもったことや疑問に思ったことについて辞書や百科事典、図書館の本で調べる事。	H27	50	50	92	8
	H28	59	41	96	3
	H29	84	16	93	7
(13) 関心をもったことや疑問に思ったことについて周りの人に質問をすること。	H27	75	25	92	8
	H28	78	22	95	4
	H29	84	16	93	7
(14) 関心をもったことや疑問に思ったことについてインターネットで調べる事。	H27	91	9	96	4
	H28	91	9	96	3
	H29	97	3	97	3

〔成果〕

- 話し合いや討論といった活動の有用性を認識し、それらの活動も定着してきている。
- 課題を探し、それを解決するために文献に当たったり、周囲の人に質問したりすることができるようになってきている。

〔課題〕

- 人前で発表したり、説明したりすることへの苦手意識が依然として残っている。

7 3年間の研究のまとめ

〔成果〕

- (生徒)話し合いや討論などの活動が社会生活において役に立つという意識が定着し、また話し合いなどの活動に主体的に取り組もうとする姿勢が身に付いた。
- (生徒)課題を解決するために必要な情報の収集や話し合いの進め方については理解が進み、活動が盛んになった。
- (教師)「習得すべき思考力・判断力・表現力」(各学年における重点項目)を明確にしたことで、授業の中でどう国語の力を育成するか具体的に意識して授業を計画することができた。

〔課題〕

- (生徒)理解していることや身に付けたことを活用できないために、論理的説明をすることが苦手である。
 - 思考を深め、活性化させていくために、実際に活用できる語彙力を豊かにするような「書くこと」「話すこと」の指導を充実させる。
- (教師)評価方法の工夫の必要性
 - 生徒の思考力・判断力・表現力をバランスよく評価していくには、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組みせ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価の研究を行っていくことが必要である。
- (教師)主体的な活動を促す学習課題の設定
 - 生徒が自らの知識や身に付けたことを活用して、主体的に学習活動ができる課題を設定することが、今後の課題である。

地歴公民科

1 3年間の研究テーマ

思考力・判断力・表現力を育成する授業実践の研究 ～ 課題解決学習を通して ～

2 研究テーマ設定の理由および研究の目的

これまでの本校における地歴公民科の授業は、教員が生徒へ知識を一斉教授する授業が主であった。しかし、現実的な問題として、推薦入試・センター試験・大学入試等においては、単に知識・理解が求められているだけではなく、思考力・判断力・表現力が問われている問題も多く見られ、本校の生徒の学力向上を実現するためには、知識・理解に加えて思考力・判断力・表現力の育成が不可欠な状況にある。一方で、生徒自身も知識・理解を偏重する学習に慣れてしまい、社会的事象に対する興味・関心が希薄であったり、諸資料を活用して考察する学習活動を苦手としていたりする場面が見られる。学力が伸び悩んでいる生徒にとっては、これらのことが、その一因となっていると考えられる。

このような状況から、生徒の思考力・判断力・表現力を育成するために上記の研究テーマを設定した。昨年度までの研究テーマでは、各科目横断的な学習内容を基礎的な知識として身に付けさせた上で、思考力・判断力・表現力が高まる学習についての研究を行ったが、今回の研究では、その成果と課題を生かした上で、より一層、有効な授業方法についての研究を進める。具体的には、授業においてどのような課題を設定し、どのような課題解決学習を取り入れていけば、生徒の思考力・判断力・表現力を育成することができるか。また、その評価についてはどのような方法が有効であるかについて研究を深めたい。

今回の研究で、生徒の主体的な学習活動が習慣化されることにより、社会的事象への興味・関心が高まり、思考・判断・表現する能力が高められることを目的とし、最終的に生徒の進路実現につながるような研究としたい。

3 教科研究概要

- (1) 思考力・判断力・表現力を高めるための課題設定の研究
- (2) 課題解決学習を取り入れた授業実践と評価方法の研究
- (3) 「アクティブ・ラーニング」を取り入れた授業の研究

4 教科における3年間の研究構想

1年目	<p>【教科研究概要】</p> <p>○ 課題解決学習の基礎的な研究を行い、本校の生徒に適する授業や評価の方法について検討し、研究の方向性を明らかにする。</p> <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 大学入試問題等において思考力・表現力・判断力を必要とする問題の研究を行い、その問題を取り入れた授業や評価の研究を行う。・ 研究公開において、課題解決学習を取り入れた授業を行い、本校生徒に適する授業方法や評価の方向性を示す。・ 課題解決学習を取り入れた授業に対する生徒の意識調査を行う。(研究期間中は継続的に実施する。)
2年目	<p>【教科研究概要】</p> <p>○ 課題解決学習の実践的な研究を幅広く行い、前年度と比較して、思考力・判断力・表現力がどのように変容してきているかを分析し、課題を把握する。</p> <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 各科目において課題解決学習を取り入れた授業を行い、その評価を考查問題等に取り入れたり、意識調査を実施したりする。それらの結果から思考力・判断力・表現力がどのように変容してきたかを分析し、課題解決学習の授業が思考力・判断力・表現力を高めているかどうかについて検証し、その成果と課題をまとめる。
3年目	<p>【教科研究概要】</p> <p>○ 前年度の課題をもとに、より良い課題解決学習の授業実践の在り方を研究するとともに、生徒の3年間の変化を分析し、研究のまとめを行う。</p> <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 前年度の授業実践の反省と、生徒の思考力・判断力・表現力の変容の分析結果に基づき、前年度に引き続き、各科目での課題解決学習による授業実践、評価問題の研究及び生徒の意識調査を実施する。・ 3年間を通しての生徒の思考力・判断力・表現力についての変化を検証し、本研究における課題解決学習の成果と課題をまとめる。

5 本年度の研究の実際

(1) 研究主題に関する基本的な考え方

課題解決学習の充実を図るためには、まず生徒が「知りたい、解決してみたい」思うような学習課題の設定が不可欠である。つまり、生徒に思考を促す方法として、生徒がこれまで身に付けてきた社会的事象に対するパラダイム（物事の見方や考え方）を揺さぶる必要がある。そこで、生徒に驚きや関心を生じさせる学習課題を設定し、それを追究・解決させる学習が重要である。

また、課題解決学習を通して思考力・判断力・表現力がどのように変容したかを評価することも必要である。この評価の点は、昨年度の研究の課題として挙げられた点である。

これらのことを踏まえ、以下に教科書分析に基づいた課題設定の手順と、思考力・判断力を見取ることができる記述式によらない評価問題の工夫について述べることにする。

(2) 教科書分析に基づいた課題設定の手順

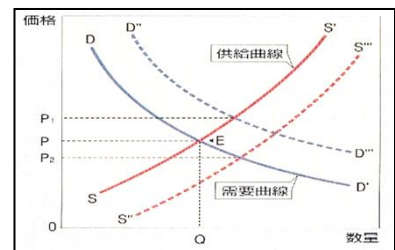
課題設定の手順は、データ・事実・結果・理論の4視点から教科書を分析することである（図1）。たとえば、図2に示した教科書の記述を、データ・事実・結果・理論の4視点から分析し、まとめた表1のようになる。※理論=高等学校学習指導要領解説公民編に示された「見方や考え方」（諸事象をとらえる概念的な枠組みにとらえる。

データ	年表、地図、資料など
事実	データから読み取れるもの
結果	事実との関係により説明されるもの
理論	データ・事実・結果を総括したもの

図1 データ・事実・結果・理論

一般に競争的な状態である市場では、需要（量）が供給（量）を上回る（超過需要）ときには価格が上昇し供給量が需要量を上回る（超過供給）ときには価格は下落する。価格が上昇すると需要量は減少する一方で供給量は増加し、価格が下落すると需要量は増加して供給量は減少するから、需要量と供給量の間にギャップがあるときには、価格の変化を通して品不足や品あまりが解消される（価格の自動調節機能）。需要量と供給量を一致させる価格は均衡価格とよばれる。

市場経済では価格は資源（生産財、消費財）の過不足を示し、その変化を通して需要と供給が調整され、ひいては限られた資源の有効活用がはかれる。このような市場の動きは市場メカニズムとよばれる。市場メカニズムがうまく機能すれば、資源の最適な配分が実現できる。



需要曲線と供給曲線

図2 教科書の記述（『政治・経済』p.122-p.123 東京書籍（一部略））

表1 教科書の記述をデータ・事実・結果・理論の4視点から分析しまとめたもの

視点	内容	教科書記述
データ	年表、地図、資料など	○ 需要曲線と供給曲線
事実	データから読み取れるもの	○ 需要（量）が供給（量）を上回る（超過需要）ときには価格が上昇し、供給量が需要量を上回る（超過供給）ときには価格は下落する。 ○ 需要量と供給量を一致させる価格（P）は均衡価格とよばれる。 ○ 価格が上昇すると需要量は減少する一方で供給量は増加し、価格が下落すると需要量は増加して供給量は減少する。
結果	事実との関係によって説明されるもの	○ 需要量と供給量の間にギャップがあるときには、価格の変化を通して品不足や品あまりが解消される（価格の自動調節機能）。
理論	データ・事実・結果を総括したもの	○ 市場経済では価格は資源（生産財、消費財）の過不足を示し、その変化を通して需要と供給が調整され、ひいては限られた資源の有効活用がはかれる。

表1のように、データ・事実・結果・理論の4視点から教科書を分析することができる。このことを通して、単元内で生徒に身に付けさせたい理論を抽出することが第二の手順である。4視点から教科書を分析する際、留意しておかなければならないことは、教科書のそれぞれの項目ごとに4視点を全て見いだせるとは限らないということである。教科書の項目によっては、事実だけの箇所もあったり、理論が含まれていない箇所もあったりする。

単元「市場経済の機能と限界」で、生徒に身に付けさせたい理論が図3である。

- 市場経済では価格は資源（生産財、消費財）の過不足を示し、その変化を通して需要と供給が調整され、ひいては限られた資源の有効活用がはかれる。
- 市場は必ずしも万能ではない。競争の状態や財・サービスの性格などにより、市場メカニズムがうまく働かない場合もある。
- 寡占や独占は市場の失敗の一つであり、市場の失敗が起こると消費者にとって不利益となる。
- 市場メカニズムをうまく働かせるためには、市場の失敗をうまく是正する政策や制度をどう整えていくのが重要となる。

図3 単元「市場経済の機能と限界」で、生徒に身に付けさせたい理論

図3に示した理論を踏まえて、生徒のパラダイムを揺さぶり、驚きや関心を生じさせる課題設定をすることが第三の手順である。

以上のように、課題解決学習を行う際の手順として、まず、教師はデータ・事実・結果・理論の4視点から教科書を分析し、生徒に身に付けさせたい理論を抽出する。そして、理論に沿うものを課題として設定し資料等を準備し、課題解決学習を構成する。

(3) 思考力・判断力を見取ることができる評価問題の工夫

前年度は、思考力・判断力の定着を見取るために記述式による評価問題の工夫をおこない、図4のような問題を定期考査で出題した。

図4 思考力・判断力の定着を見取るための記述式による評価問題（世界史B）

以下の語句を用い、イスラーム教はどのような宗教か、信仰している神と聖典について言及し、記述の形式で説明せよ。 語句 六信五行 （3点）

図4の評価問題は、世界史B授業イスラーム教が偶像崇拝を禁じていたことについて話し合い活動をおこなったことをふまえて出題したものである。出題の意図は、生徒がイスラーム教が偶像崇拝を禁じていたことに言及し、教科書の基本的な語句を用いて適切な記述がなされることにあった。生徒の取り組み状況は、概ね改善したといえる。すなわち、白紙解答が大きく減少し意欲的な姿勢が顕著になったことや、題意を満たす論理的な記述が増えたことから、生徒の変容を認めることができた。今年度は、さらに記述式によらない評価問題によって思考力・判断力の定着を見取るところをこころみた。さまざまな角度から生徒の微細な変容をとらえ、得点化することは大いに意義のあることと考える。

中央教育審議会答申（平成20年1月）には、思考力・判断力・表現力をはぐくむために、必要な学習活動を、以下の①～⑥のように示している。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する。
- ② 事実を正確に理解し伝達する。
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- ④ 情報を分析・評価し、論述する。
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

①～⑥を踏まえ、思考力・判断力を見取ることができる記述式によらない評価問題を構成する際の視点を三つに整理した。

- 情報の分析・評価を問う視点
- 概念・法則などの解釈を問う視点
- 事実と概念・法則などの関係を問う視点

三つの視点から作成した思考力・判断力を見取ることができる記述式によらない評価問題の例が表1である。

表1 思考力・判断力を見取ることができる記述式によらない評価問題の例

評価問題を構成する際の視点	評価問題の例
情報の分析・評価を問う視点	<p>以下の資料に示された人間観に近い人間観をもつ思想家の組み合わせとして正しいものはどれか。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>君が自らの見解を変えようとして読書をしたとしても、君の見解が変わるきっかけは、書物の著者から与えられたものだ。君は書物を媒介にその著者と語り、君自身の見解を改めたに過ぎない。つまり、君が自らの見解を変えようとしてはたらいのは、外からの力、「外的な作用」なのだ。</p> <p>人間ってのは「外的な作用」でつくられるんだ。言葉を換えれば、内から創り出すものなんて何にもない。人間が新しい見解だの、新しい信念、行動だのってもんを身に付けるとしても、その衝動になるのは決まって「外的な作用」なんだ。</p> <p style="text-align: right;">マーク＝トウェイン『人間とは何か』を基に作成</p> </div> <p>①ベーコン、デカルト ②ヘーゲル、ベンサム ③カント、ラカン ④サルトル、フーコー</p>
概念・法則などの解釈を問う視点	<p>「主体 (subject) とは、「sub＝下」, 「ject＝属する」であるように、従属的なものである」という解釈と一致する記述はどれか。</p> <p>①「私がそのように生き、そして死にたいと思うようなイデー」 ②「われ思うゆえにわれあり」 ③「主体が或る像を [自分のものとして] 引き受けるとき自らに生じる変形…」 ④「満足した豚よりも不満足な人間であるほうがよい」</p>
事実と概念・法則などの関係を問う視点	<p>「円高が進むと、中小企業が利益を減らす」という因果関係の根拠となりえない理論はどれか。</p> <p>①円高により輸出が減る。 ②円高により銀行の金利が高くなる。 ③産業の空洞化が進む。 ④ 中小企業のほとんどが大企業の下請けである。</p>

数学科

1 3年間の研究テーマ

アクティブ・ラーニング型授業による数学的な思考力・表現力の育成に関する研究

2 研究テーマ設定の理由および研究の目的

本校に入学する生徒のおよそ9割は、入学学力検査において、記述式の問題に取り組んでおらず、入学後も、記述式の問題に苦手意識をもつ生徒が多い。記述や口頭による数学的な表現活動は、表現力のみならず、数学的な思考力にも関連するものである。また、大学入試の個別学力試験や、推薦入試の口頭試問においても、正答を出すことはもとより、それを導き出す過程にも重点がおかれている。全校生徒の約6割が国公立大学を志望する本校生徒の進路目標達成のためにも、数学的な思考力・表現力の育成は、本校数学科において非常に重要な目標の一つである。

一方、内面的、主体的な思考を、外面的、客観的な形あるものに表すことが「表現」であり、表現活動そのものが主体的な活動である。したがって、生徒の能動的な学習を取り入れた授業形態であるアクティブ・ラーニング型授業（以下AL型授業）の実践によって、数学的な思考力・表現力が効果的に育成できると考えられる。

以上のことから、本研究においては、数学的な思考力・表現力を育成するための有効な手段として、AL型授業に着目し、その実践的検証を行うことを目的とする。

3 教科研究概要

- (1) 昨年度の研究の分析を基にした本年度研究内容の焦点化
- (2) 習熟度別編制クラスにおけるAL型授業の実践
- (3) リフレクションの在り方の工夫及び実践
- (4) (2), (3)の検証並びに改善案の検討

4 教科における3年間の研究構想（案）

1年目	【教科研究概要】 <ul style="list-style-type: none">○ 本校の授業実践の振り返りによる、AL型授業の実態調査○ 県内外におけるAL型授業の研修視察、または先行研究の第一人者による研修○ 本校におけるAL型授業の実践方法の検討と、授業における実験的導入 【具体的研究内容】 <ul style="list-style-type: none">・ 本校におけるAL型授業の現状把握と講師招聘による研修の実施（5～8月）・ 上記を踏まえたAL型授業の実験的導入（研究公開）（5～11月）
2年目	【教科研究概要】 <ul style="list-style-type: none">○ 習熟度別編制クラスにおけるAL型授業の実践○ リフレクションの在り方の工夫 【具体的研究内容】 <ul style="list-style-type: none">・ 1年目の研究により得られた課題に基づく、実践方法の改善（1学期）・ 改善した授業実践の検討、研究公開（2学期）
3年目	【教科研究概要】 <ul style="list-style-type: none">○ 1, 2年目の授業実践の反省と改善案検討○ 数学的な思考力・判断力・表現力の評価方法の改善案検討○ AL型授業による数学的な思考力・判断力・表現力の育成について実証的研究のまとめ 【具体的研究内容】 <ul style="list-style-type: none">・ 数学的な思考力・判断力・表現力の評価方法の研究（1学期）・ 授業実践と研究のまとめ（2～3学期）

5 研究の実際

(1) 1, 2年目の授業実践の成果と反省

A L型授業の実践をとおして数学的な思考力・表現力の育成を試みた、2年目までの実践例と成果・反省は次のとおりであった。

実践例	○成果と●反省
<ul style="list-style-type: none"> 演習で生徒が板書し、解説まで終わった後、数値を変えた問題を全員で読み上げる。 	○ 問題の数値設定に注意が必要だが、効果的であった。
<ul style="list-style-type: none"> 問題が解けた者を教室後方に集め、正解者は解けてない者に教授する。 	○ 少人数授業では効果的である。 ● 毎回実施することが難しい。
<ul style="list-style-type: none"> 要所を解説後、演習を行い、解き終わったら検印。その後教師役になり教えあう。 	○ 数学が不得意な生徒も検印をもらうことが成功体験となり意欲向上につながった。
<ul style="list-style-type: none"> 全員起立させ、理解できたら座らせる。周囲と相談してもよい。全員着席できたら確認の意味で解説をする。 	○ 自ら解こうとする者が増えた。 ○ 分からないところを詳しく質問しやすくなった。 ● 活発に活動することができたが、不得意な生徒には教員側の手助けも必要である。
<ul style="list-style-type: none"> グループで演習に取り組み、黒板に板書する生徒と説明をする生徒を別にし、表現力の育成をはかった。 	○ 節末問題などで主に実施した。上位層では活発な活動となった。 ● コミュニケーションをとることが不得手な生徒はなかなか進まなかった。
<ul style="list-style-type: none"> 問題集をグループ学習で進めた。 説明→基本問題→応用問題→確認テスト→リフレクション 	○ 楽しんで取り組んでいる生徒もいた。 ● グループ学習がうまく機能しなかったり、応用問題に取り組む段階で滞ったりするグループがあった。
<ul style="list-style-type: none"> 問題の解説や用語、公式を説明する中で空欄をつくり、そこに入る言葉や数字を考えさせる。 	○ マーク試験の考え方と似ており、慣れさせる効果があるのではないかと。 ○ 受け身的に解説を聞くのではなく、要点を自分で考えることができる。

様々な形でのA L型授業を模索してきたが、対象となる生徒や取り扱う単元により、活発な話し合いができ、生徒の理解も深まったり、話し合いの時間をとりすぎて思うような進度で進められなかったりと、まだまだ改善点はある。今後も研究をすすめ、より良い授業展開ができるようにしたい。

(2) リフレクションの在り方の工夫と実践（2年目の研究）

授業の終末で、本時の授業内容の理解（学習目標の達成度）や授業の受け方（態度目標の達成度）についてリフレクションカード（**図1**）を利用して自己評価を行わせ、学習前と学習後の自己の変容を確認させた。この活動を積み重ねることで、生徒自身が学習内容について分かったことと分からなかったことを整理できるとともに、目的意識をもち、次時の授業を受けることができた。このことは、主体的な学びの実現につながっていると考えている。

リフレクションの実践による○成果と●反省

- 本時の授業で分かったことと分からなかったことを確認することができ、自宅学習で取り組むべきことが明確になる。
- 1週間の授業内容のポイントを容易に確認できる。
- リフレクションの実践を積み重ね生徒の記述データを分析し、主体的な学びとなるようなリフレクションカードの工夫改善を図る。

以下の項目について本時の授業を振り返ってみよう。

1 授業の受け方について

授業で、以下のことが出来ましたか？（当てはまる□にレ）

疑問をもつ，質問する 他人に説明する 協力する

2 授業内容について

① 授業で説明された問題を理解できましたか？

できた どちらとも言えない できなかった

② 今日の授業のポイントは何ですか？

③ 分からなかったことや質問してみたいことは何ですか？

図1 リフレクションカード

(3) 数学的な思考力・表現力の育成と評価方法について

本年度の取り組みとして、定期考査の中に数学的な思考力・表現力の評価を意識した問題を取り入れた。

出題例①

(1年 1学期期末考査より)

ある放物線を、 y 軸に関して対称移動し、さらに、 x 軸方向に -2 、 y 軸方向に 1 だけ平行移動したら、放物線 $y = x^2 + 6x + 10$ に移った。もとの放物線を求めよ。

309名受験し

5点 11名 4点 11名 3点 1名 2点 61名 1点 98名 0点 127名
5点満点中 平均 1.04点

出題例②

(1年 1学期期末考査より)

グラフと x 軸が共有点をもたないような2次関数の例を1つだけあげなさい。

308名受験し 完答者 90名(2点満点，部分点なし)

出題例①のように、少し複雑な形式で問題を出題すると、何から考えればよいか分からない（考えようとしな）生徒が多いことが分かった。部分点が1点の生徒のほとんどは平方完成をして終わっており、部分点が2点以上の生徒は、平行移動や対称移動を試みた生徒である。

出題例②については高い正解率を期待したが、約3割の正解率となり、問題の形式を変えられると対応できないという傾向があることが分かった。あるクラスでテスト返却時に少しヒントを与えながら、再度問題に取り組ませると、8割ほどの生徒は正解にたどりついた。このことから、授業の中でも少しのヒントを与えれば解答にたどり着く生徒は多いが、考査等の自分の力だけで考えなければいけない問題を苦手としている生徒が多いことが分かった。

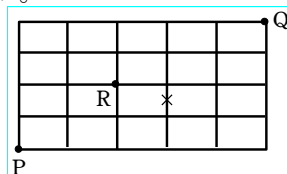
二つの考査問題から分かるように、本校1年生の思考力・表現力には課題が見られ、引き続き評価問題の工夫とあわせて授業改善が必要であることが分かる。

また、AL型授業の課題の中で、授業での理解度がテストの中で成果として感じられないという意見があったため、9月に授業での理解度と実際のテストでの正解率を比較した。

- 対象：1年全クラス（8クラス 311名）
- 方法：考查1週間前の授業時にAL型授業において最短経路の問題に取り組む。授業後問題に対して以下の4項目で自己評価する
 - ① 解けた
 - ② 周囲と相談して解けた
 - ③ 先生の解説を聞いて理解した
 - ④ 理解できなかった
- 授業で扱った問題

右のような道のある地域で、点Pから点Qまで遠回りしないで行くとき、次のような道順は何通りあるか。

- (1) すべての道順
- (2) Rを通る。
- (3) Rを通らない。
- (4) ×印の箇所を通らない。



- 授業での自己評価と考查での正解率の比較

自己評価		問題番号			
		(1)	(2)	(3)	(4)
①	解けた	85.4%	75.9%	51.1%	11.1%
②	周囲と相談して解けた	8.6%	17.6%	32.4%	31.9%
③	先生の解説を聞いて理解した	4.3%	4.7%	13.3%	48.9%
④	理解できなかった	1.8%	1.8%	3.2%	8.1%
①～③計	「理解できた」の合計	98.2%	98.2%	96.8%	91.9%
2学期中間考查での正解率		問題番号			
		(1)	(2)	(3)	
		58.4%	46.2%	34.8%	
自己評価との差（ポイント）		-39.8	-52.0	-62.0	

授業での自己評価の中では、すべての問題において、理解していたと回答していた者が90%以上（自己評価の①～③の人数の割合）であったが、実際の考查の中では正解率が下がる結果となった。計算ミス等もあるため、若干正解率が下がることは予想していたが、予想以上に定着できていなかった。

この原因としては、AL型授業の中では、解けない問題について、周囲にすぐ質問できる環境にあり、少しのヒントで答えを導き出すことができるため、それを理解できたと感じているが実際には理解へとつながっていないことが推測される。

また、今回は各クラスによって様々な方法で授業を行ったが、普段の授業と比較し活発な話し合い（教え合い）ができたクラスもあり、細かく分析してみるとそのクラスは最短経路以外の問題と比較すると高い正解率であったことが分かった。このことからその単元やクラスの現状にあったAL型授業がしっかりとかみ合えば、授業の中で生徒も解けたことが実感でき、なおかつしっかりと知識として定着できる授業を行うことができることが分かった。

6 研究のまとめ

(1) 職員の感想

ア 研究の成果

○ 自ら解こうとする姿勢が増えた。

- 授業以外でも積極的に質問するようになり、生徒同士で学びあうことで教えることも自分にとってプラスになることが自覚できるようになった。
- 今までの講義形式の授業より、生徒は積極的に取り組んでいた。
- 人の意見を聞くことでアイデアが増え前向きな解答が増えた。
- 人に教えることにより理解が深まったという生徒がいた。
- 数学が苦手な生徒でも授業に参加した（問題が解けた）という達成感が得られ、それが次回の意欲につながる。そのため、授業での発言が増えていると感じることができた。
- 以前は机間指導で理解度を確認していたが、AL型授業により、理解度が把握しやすくなりスムーズに授業を進めることができた。

イ 今後の課題

- 習熟度、特に下位クラスに対して効果的な指導法を引き続き模索していきたい。
- 自分自身で粘り強く考える習慣が減り、個人で学ぶ力を育成できていないようだ。生徒の状況をみながら、活動を取り入れていく必要がある。
- 活発な話し合いを意識すると、問題の難易度を上げられなかったり、授業の進度がなかなか進まなかったりする。単元全体を見通して、活動の位置づけを工夫する必要がある。
- 活発に話し合いができ、学習内容の定着を期待するが、テストになるとその成果がみられない。定着をはかる工夫が必要である。
- 教員側からの説明や板書が少なくなり、分野によっては定着度が悪いと感じることがある。ICT活用や板書の計画を丁寧に行う必要がある。
- どのような生徒に対して、どのような教授方法が効果的で、またどのような授業内容に対してどのような教授方法が有効であるのかが判断しづらかった。指導と評価の一体化を進めることとあわせて教員の指導力向上が必要である。

ウ その他

- ・ AL型の授業を取り入れてから、生徒の表情を見ながら授業をするという当たり前のことが今までできていないことに気付いた。また、クラスにより授業の進め方が異なるため、工夫し、失敗して反省することもある。このことを通して生徒と向かい合い同じ方向を向いて授業をすすめるようになった。
- ・ AL型の授業もいろいろな種類があるが、生徒の実態に応じて試していきたい。
- ・ 教員側からの解説が少なくなる分しっかりと準備やシミュレーションをして授業に臨まなければならない。
- ・ 他校の授業を参観させていただき、刺激を受け、同様にやってみようとするがうまくいかないことが多い。松陽高校生にあったスタイルを追究していきたい。
- ・ 年々、生徒の読解力が落ちてきていると感じるので、数学の授業においても正しく読解する能力の育成を心掛けていきたい。

(2) 研究の総括として

3年間、AL型授業における数学的な思考力・表現力の育成について研究して、感想にもあるように、成果として手応えのあるものが得られず試行錯誤を繰り返してきたが、特に3年間中心になって取り組んできた現3年生の対外模試結果を分析してみると7月進研模試について過年度比較において昨年、一昨年度は30%強の割合であった下位層が本年度は17%に減少していた。このことから、特に下位層については授業において積極的に活動できる機会が多くなったことによる一定の効果があったのではないかと思われる。また上位層の生徒についても数値的などころには表れていないが、教え合いをする中で分からない生徒に分かるように説明しようとして工夫する中で思考力・表現力を育成できたように感じる。

今回、この研究に取り組み、数学科全体としてAL型授業を積極的に取り入れる良いきっかけとなった。まだまだ研究不足な部分はあるが、今後の課題としてより良い授業の研鑽に努めていきたい。

理 科

1 3年間の研究テーマ

科学的な思考力・判断力・表現力を育成する授業改善
～課題解決的な観察，実験を通して～

2 研究テーマ設定の理由・研究の目的

2013年度より実施された学習指導要領では、「確かな学力」として基礎的・基本的な知識・技能だけではなく、思考力・判断力・表現力の育成が重視され、様々な場面で言語活動が取り入れられるようになった。一方、理科の学習内容は以前よりも増加し、授業時数の確保が厳しい状況でもある。

理科部では、効果的に思考力・判断力・表現力の育成を行うために、生徒の主体的・協働的な学びを普段の授業に取り入れ、観察，実験の授業改善を研究することが重要であると考え、本研究テーマを設定した。

3 教科研究概要

- (1) 身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の検討
- (2) 言語活動を充実させ、協働的な学びを取り入れた学習活動の検討
- (3) 思考力・判断力・表現力の効果的な育成のための教材やワークシートの開発
- (4) 学んだことを定着させるための、効果的な振り返り活動の検討
- (5) 問題発見や課題解決を促す問いや活動の検討
- (6) (1)～(5)の各科目における検証，次年度への継続

4 本教科における3年間の研究構想

1年目	<p>【教科研究概要】</p> <ul style="list-style-type: none">○ 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の検討○ これまでの指導をもとにした研究計画の作成○ アクティブ・ラーニング型の授業を取り入れた観察，実験の導入 <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 現在の生徒の思考力・判断力・表現力の分析（現状把握）・ 現状を踏まえた、身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の検討・ グループでの話し合いによる観察，実験の計画
2年目	<p>【教科研究概要】</p> <ul style="list-style-type: none">○ 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の吟味○ 1年目の研究成果の検討，授業方法の改善○ アクティブ・ラーニング型の授業を取り入れた問題発見や課題解決を促す観察，実験の検討・実践 <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の評価の工夫・ グループで計画した観察，実験の妥当性と生徒の変容の見取り・ 問題発見や課題解決を促す観察，実験の計画及び考察，発表
3年目	<p>【教科研究概要】</p> <ul style="list-style-type: none">○ 1，2年目の研究の改善○ 研究成果の分析・まとめ <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 問題発見や課題解決を促す観察，実験の計画や考察，発表の継続・ 生徒の変容の見取りと改善策の検討

5 本年度の研究の実際

(1) 1, 2年目の研究の改善

これまで、アクティブ・ラーニング型の授業を取り入れた問題発見や課題解決を促す観察、実験を導入することにより、生徒が主体的・協働的に学ぶ場を設定してきた。その結果、観察、実験に積極的に取り組む生徒が増え、発表時には自分の考えを的確に相手に伝えられるようになってきたが、一度観察や実験を行った内容でもすぐに応用問題に対応する意欲や解決する力がつくわけではないことがわかった。よって、改善点として振り返りの時間を設定し、リフレクションカードを導入することにした。また、生徒の思考力・判断力・表現力の育成を行うためには、生徒の主体的・協働的な学びを普段の授業にも取り入れることが重要だと考え、問題演習の際にも小林昭文氏（産業能率大学教授）の授業を参考にした。

(2) アクティブ・ラーニング型の授業の実践と工夫（物理での取り組み例）

① ワークシートの作成

次回学習する内容をまとめたワークシートを事前配布する。空欄補充形式のプリントとなっており教科書を読めば埋められる程度の内容とした。また、事前に内容の中から「疑問点」を考えてくることになり、問題提起へと繋がる重要な学習として位置づけた。

② 態度目標の明確化

「話す」、「質問する」、「説明する」、「動く」、「協力する」、「貢献する」といった態度目標を明確化することにより生徒の能動的な活動を促した。

③ 「疑問点」の共有

学習内容の「疑問点」をグループや学級全体で共有することにより、深い学習への動機付けを行った。また、問題提起を行う重要なトレーニングと考えた。

④ 内容説明の効率化

アクティブ・ラーニング型の授業を効率的に行うために、ICTを活用し、教師による内容説明はできるだけ短時間でを行い、言語活動の時間を多く設定した。

⑤ 簡単な観察・実験の導入

実験を行うことで生徒の興味・関心を引き出し、結果を予想させ、話し合いの時間を取ることで、生徒の思考力・判断力・表現力が身に付くのではないかと考えた。

⑥ 問題演習による言語活動

問題演習は、グループ活動を通じた言語活動を中心に行わせた。National Training Laboratories「ラーニングピラミッド」によると、一方向で教えられたときに生徒の記憶に残る割合は5%なのに対して、「教えたとき」の記憶に残る割合は90%であると示されており、教えるという役割を生徒から奪わないことが重要であると考えた。

⑦ 確認テストの実施

授業の終末に、確認テストを実施した。これは、生徒活動状況や理解度を確認するためだけでなく、生徒のグループ学習を活性化させるために重要な役割を果たすと考えられる。テストが実施されること、開始時間が決まっていることにより、目標が明確化され、グループ活動の活性化に繋がっていると考えられる。テストは演習問題の中から同じ問題を出題するが、答えの理由を述べさせ、論理的に表現させることにより言語活動の育成を図った。

⑧ リフレクションカードの導入

授業の振り返りをさせるとともに、その後の学習計画を意識させるためにリフレクションカードを導入した。また、質問は態度目標、内容目標および感想の3つで固定した。振り返りを生徒自身が行うことで、次への行動計画を促すことができると考えた。

【アクティブ・ラーニング型の授業を継続して受けた生徒の感想】

- ・ 授業内容が、1学期に比べて分かるようになってきた。
- ・ 友達に説明することで、自分の理解も深まった。
- ・ 自分の苦手な分野をもっと復習しようと思った。
- ・ 少し難しい問題もあったが、教えてもらうことで理解することができた。
- ・ 最近、授業が楽しくなってきた。少しずつ得意な分野を増やしていきたい。
- ・ 難しい問題も友達と協力することで解決することができた。
- ・ 学力がついたという手応えを感じる事ができた。

【ワークシート】

物理基礎【音の性質】教科書 103～105

A 音波
 ・媒質である _____ を振動させて伝える _____ である。
 ・振動することにより音を発生させる物体を _____ (発音体) という。

B 音の速さ
 ・気温を $t(^{\circ}\text{C})$ とすると、音の速さ $V(\text{m/s})$ は、 $V = \text{_____}$ と表される。

C 音の三要素
 ① 音の大きさ…波の _____ によって決まる。
 ② 音の高さ…波の _____ によって決まる。
 ③ 音の音色…波の _____ によって決まる。
 ・人の聞くことのできる振動数は $20 \sim 20000\text{Hz}$ 。これを超えると、 _____ という。

D 音の反射
 ・音は、波としての性質を示すため、反射をする。
 例 _____

E うなり
 ・振動数の異なる発音体を同時に鳴らすと、周期的に音の強弱が繰り返されて聞こえる現象。
 ・1秒あたりに生じるうなりの回数 f 回は、音源の振動数をそれぞれ $f_1(\text{Hz})$ 、 $f_2(\text{Hz})$ とすると、
 $f = \text{_____}$ と表すことができる。

★疑問点を自由に書いてみよう

[_____]

【確認テスト】【リフレクションカード】

確認テスト _____ 年 組 番 氏名 _____

①
 温度 $t(^{\circ}\text{C})$ の空気中を伝わる音の速さ $V(\text{m/s})$ が $V = 331.5 + 0.6t$ と表されるとする。
 10°C の空気中を伝わる音の速さは何 m/s か。小数点以下を四捨五入して答えよ。

答 _____

②
 おんさ A と振動数 400Hz のおんさ B を同時に鳴らすと、毎秒 4 回のうなりが聞こえたが、B の枝に輪ゴムを巻いて同時に鳴らすと、うなりは聞こえなかった。おんさ A の振動数 $f_A(\text{Hz})$ を求めよ。また、その理由を文章で説明しなさい。

答 _____

【理由】
 [_____]

【リフレクションカード】

1 態度目標にそって活動できましたか？
 また、活動する中で気づいたことや感じたことは何ですか？

ア よくできた イ できた ウ あまりできなかった エ 全くできなかった
 [_____]

2 内容目標にそって内容を理解できましたか？
 また、解決しなかった疑問はどういうことですか？

ア よくできた イ できた ウ あまりできなかった エ 全くできなかった
 [_____]

3 この時間の感想を書いて下さい。
 [_____]

6 3年間の研究の成果と課題

成果

アクティブ・ラーニング型の授業を取り入れた問題発見や課題解決を促す観察、実験を導入することにより、観察、実験に積極的に取り組む生徒が増え、発表時には自分の考えを的確に相手に伝えられるようになってきた。また、リフレクションカードを導入することにより生徒自身が次への行動計画を立てるようになってきた。実際、アクティブ・ラーニング型の授業を取り入れてからは、授業終了後も生徒同士で教え合う姿や次の授業の予習をしてくる生徒が増えてきた。また、アクティブ・ラーニング型の授業に継続して取り組んできたクラスを対象に意識調査を行ったところ、どの項目でも「とてもよくなった」・「すこしよくなった」という意見がほとんどであり、否定的な感想をもった生徒はほとんどいなかった。この意識調査から、アクティブ・ラーニング型の授業は、生徒の授業に対する満足度が高いことがわかる。

課題

これまで、実践してきた感触として、定期考査等で一部の単元での成績向上が見られたものの、模擬試験等での成績向上は特に見られなかった。長期的な内容定着には、授業の工夫だけではなく適切な課題を与える等、他の取組も複合的に実践する必要があると考えられる。また、習熟度別下位のクラスではアクティブ・ラーニング型の授業を週 1 回程度行いたいという意見が多い一方、習熟度別上位クラスでは月 1 回程度でよいという意見が多く、同じ授業を展開していてもクラスによって受け止め方が違うことがわかる。1つの型にこだわるのではなく、生徒の実態に合わせて柔軟に対応する必要があると考える。今後は、生徒の実態に合わせて、アクティブ・ラーニング型の授業を実施する時期や場面を吟味し、指導計画を作成したり、ワークシートや課題設定を工夫したりする必要があると考える。

【生徒の意識調査（2年生・物理選択者60人を対象）】

1 物理が好きになったか？		2 物理の授業が楽しくなったか？		3 授業内容の理解が深まったか？	
とてもなった	11	とてもなった	23	とてもなった	28
すこしなった	35	すこしなった	32	すこしなった	26
変わらない	14	変わらない	5	変わらない	6
嫌いになった	0	楽しくなくなった	0	深まらなくなった	0

<p>嫌いになった 0%</p> <p>とてもなった 19%</p> <p>すこしなった 57%</p> <p>変わらない 24%</p>	<p>楽しくなくなった 0%</p> <p>とてもなった 39%</p> <p>すこしなった 53%</p> <p>変わらない 8%</p>	<p>深まらなくなった 0%</p> <p>とてもなった 47%</p> <p>すこしなった 43%</p> <p>変わらない 10%</p>
---	--	---

4 積極的に授業に参加するようになったか？		5 問題が解けるようになったか？		6 AL型授業はどのくらいの頻度で行いたいのか？	
とてもなった	23	とてもなった	16	毎回	12
すこしなった	28	すこしなった	38	週1回程度	27
変わらない	9	変わらない	6	月1回程度	20
消極的になった	0	解けなくなった	0	行わない	1

<p>消極的になった 0%</p> <p>とてもなった 38%</p> <p>すこしなった 47%</p> <p>変わらない 15%</p>	<p>解けなくなった 0%</p> <p>とてもなった 27%</p> <p>すこしなった 63%</p> <p>変わらない 10%</p>	<p>行わない 2%</p> <p>毎回 20%</p> <p>週1回程度 45%</p> <p>月1回程度 33%</p>
--	--	--

6 アクティブ・ラーニング型授業はどのくらいの頻度で行いたいのか？(クラス比較)		
	習熟度別（上位クラス）	習熟度別（下位クラス）
毎回	0	12
週1回程度	6	21
月1回程度	11	9
行わない	1	0

7 参考文献

- ・ すぐ実践できるアクティブ・ラーニング高校理科 学陽書房 西川純著
- ・ アクティブ・ラーニング入門 産業能率大学出版部 小林昭文著

1 3年間の研究テーマ

Expressing ideas through reading and listening actively

2 研究テーマ設定の理由および研究の目的

本校生徒の英語学習における課題は、読解や聴解活動において、目的や意図をもって読んだり聞いたりする能動的な取組の不足である。その要因として、これまでの授業では、読解した、または聴解した内容をまとめたり、内容に関しての自分なりの考えを発信したり、そこから発展してさらに自ら関連事項について学習する姿勢を育んだりする場面が少なかったことが考えられる。この結果、生徒の思考・判断は深まらず、読んだり聞いたりした内容を基に、自らの考えを表現する力もなかなか身につかないのが現状である。

これらを踏まえて、今回の研究課題では、思考力・判断力・表現力を総合的に伸ばすために、「読んだり聞いたりした情報を基に、その内容に関する自分の考えなどを相手にわかりやすく英語で表現できるようになる」ことを目標に設定した。このような目標を設定することで、読解や聴解活動における動機付けとなり、より能動的に活動に取り組むことができ、生徒の思考力・判断力・表現力の育成、ひいては4技能の総合的な育成につながるのではないかと考えた。

そこで、読んだり聞いたりする活動から、書いて表現する活動にいたるまでの過程において、内容に関する自分の考えをお互いに伝え合うような活動を織り交ぜたり、関連事項について調べたり、実践したりしたことをまとめさせたりするなど、アクティブ・ラーニングの考え方を取り入れながら、技能を統合的に活用させる活動を通じた実践を行うことにした。

3 英語科研究概要

- (1) 思考力・判断力・表現力の評価規準と、これらが身についたどうかを判断するための基準の検討
- (2) 学習段階に応じたライティングの到達目標の検討および目標達成のための指導法の共有
- (3) 技能統合型およびアクティブ・ラーニングの要素を取り入れた授業実践

4 英語科における3年間の研究構想

1年目	<p>【教科研究概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 到達度を測るための技能統合型テストの開発と、その実施による実態調査 ○ 評価規準の設定と単元目標に応じたアクティブ・ラーニングの実験的導入 ○ 学習段階に応じたライティングの到達目標の検討 <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ テストは5・2月の2回実施で、①読む→書く、②聞く→書く、の2パターンを作成 ・ 学期に1回を目安とし、各学年で評価規準を検討し、教科内で共有 ・ 思考力・判断力・表現力を評価するための判断基準の検討
2年目	<p>【教科研究概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 技能統合型およびアクティブ・ラーニングの要素を取り入れた授業実践 ○ 読んだり聞いたりしたことをもとに書く力を効果的に育成する指導法の検討 <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の実態把握と授業改善の検証のため、テストは継続実施（2月予定） ・ 学期に1回を目安とし、各学年で評価規準やその判断基準を検討し、教科内で共有 ・ ①読む→書く、②聞く→書く、③読む→話す（聞く）→書く等、技能統合の授業実践
3年目	<p>【教科研究概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 3年間の技能統合型テストの結果による研究成果の検証 ○ 学習段階に応じたライティングの到達目標の設定および目標達成のための指導法の共有 ○ 本校生徒に効果的であったアクティブ・ラーニングのまとめ <p>【具体的研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ テストは8月に実施し、3年間のデータを統計処理し、結果を検証（評価規準、判断基準をもとに、それぞれの項目の伸びを分析）

5 3年間の研究のまとめ

(1) 思考力・判断力・表現力の評価規準と、これらが身についたどうかを判断するための基準の検討

①自己評価規準 (Can-do リスト等) について

今回の研究では、思考力・判断力・表現力を評価する規準として、「読んだ情報を基に、その内容に関する自分の考えなどを相手にわかりやすく英語で表現できるようになる」ことを目標に設定した。そこで本校で以前作成した「Can-do リスト」と「リーディングに関する調査」を用いて学習到達度を調査した。

調査結果は個人差が大きく、また3年間で学校平均としては大きな変容はみられなかった。「教科書を読んで」と前置きした自己評価の調査であり、教科書は学年が上がるごとに難しくなっているため、生徒が「できるようになった」と感じにくいためだと思われる。また教師から見て「生徒たちはずいぶん成長した」と感じていても、自己肯定感の低い生徒や、英語を苦手としている生徒は「～ができる」と答えにくいようで、教師と生徒の間に認識のずれがあった。自己評価後の自由記述では「英文を書くことが苦手だとわかったのでこれからがんばりたい」といった記述が見られることから、規準を設定し自らを振り返る活動自体は、生徒の英語学習には効果的であった。しかし実際に力が身についていることを生徒に実感させるためには、テストなど実施し他者から客観的に評価される機会を設けることや、生徒が自分の学力の伸長や学習の足跡を確認できるような手立てを講じることなどが必要だと考えられる。

②技能統合型テストの開発と実施について

3年間かけて本校で技能統合型テストを開発した。テストの内容は「友人関係についての話し合いに関する英文を読み、意見した人物の発言内容をまとめ、自分の意見を具体例を取り入れながら記述する」(語数は70語以上、出典：大学入試センター試験2009年度本試) というものである。

1年目はテストの回答の特徴を分析し、2年目は生徒の回答を個別で比較することでどのように表現力が向上しているかなどを分析して、評価規準について検討してきた。3年目は、2年目までに設定した5つの評価規準について判断基準(a-d)を設定した。

それぞれの学年の回答の特徴を以下に掲載する。このような特徴を踏まえ、評価規準を作成した。

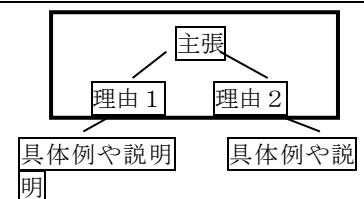
1年次	2年次	3年次
<ul style="list-style-type: none"> ・主張を支える理由が読み取れず重要な部分を抜き出せない。 ・一文単位で正しく書けるか(structure)について課題が多く、主語か動詞が欠け、何をいいたいのかわからない文章が多い。 ・接続詞を用いた段落構成のあり方を知らない生徒が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本文の主張は読み取れているが、それを支える理由の2つのうち1つしか書いていない生徒がほとんどである。 ・本文を引用する際に人称を変換することに困難があるようだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本文の主張を支える理由を2つとも読み取ることのできる生徒が増えた。 ・自分の主張を行う際に、説得力のある根拠や具体例を述べることには、まだ課題が残る。 ・主節には主語と動詞を書くことができるが、従属節内に主語か動詞が欠ける生徒が多い。

③読んだことをもとに書く力の評価規準

3年間の研究を経て、最終的に本校での評価規準は以下のように決定し、作文の評価等で活用している。

評価規準1：英文を読んで、内容を英語で要約できる。

- a: 話の結論や主張が表現されていない。Doesn't summarize at all
 b: 話の展開の核や主張の理由となる部分が一部分は表現されている。Only summarizes one part of the opinions and reasons
 c: 話の展開の核や主張の理由となる部分が半分は表現されている。Only summarizes half of the opinions and reasons



- d: 話の結論や主張とそれを支える理由がすべて表現されている。Summarizes completely

評価規準2：読んだ内容に関して、自分の意見を英語で書くことができる。

- a: 主張が不明確である。Opinion is unclear
 b: 主張は明確だが、それを支える理由がない。Clear opinion but no supportive reasons
 c: 主張は明確だが、それを支える理由が不適切で理解しにくい。Clear opinion but reasons are insufficient
 d: 主張とそれを支える理由が明確に表現されている。Opinions and reasons are appropriate and clear

評価規準3：主語と動詞のある文章で表現できる。

- a: 主語と動詞のある文章がない。No sentences have both a subject and verb
 b: 全体の半分未満は、主語と動詞のある文章である。Under half of sentences have a subject and verb
 c: 全体の半分以上が、主語と動詞のある文章である。Over half of sentences have a subject and verb
 d: すべて主語と動詞のある文章で表現されている。All sentences have both a subject and verb

評価規準 4： 前文とのつながりを意識して、接続詞や代名詞を適切に使うことができる。

- a: 代名詞や接続詞の使い方が不適切であり、前文とのつながりを理解しにくい。 Most conjunctions and pronouns are used incorrectly or missing and it is difficult to understand how sentences are connected
- b: 代名詞や接続詞の使い方に間違いが多く、前文とのつながりを理解しにくい。 Many conjunctions and pronouns are used incorrectly or missing and it is difficult to understand how sentences are connected
- c: 代名詞や接続詞の使い方が一部間違っているが、前文とのつながりは理解できる。 Sentences are connected in a way that is understandable but some conjunctions and pronouns are used incorrectly or missing
- d: 接続詞や代名詞の使い方に間違いがなく、前文とのつながりを理解しやすい。 All conjunctions and pronouns are used correctly to connect sentences in a way that is easy to understand

評価規準 5： 指定された長さ（語数等）の英文を書くことができる。

- a: 全く書いていない。 No answer
- b: 指定された長さの半分未満は書かれている。 Under half of the required length
- c: 指定された長さの半分以上は書かれているが、長さが満たない。 Over half of the required length
- d: 指定された長さで書いている。 Meets the required length

④技能統合型テストと評価規準の妥当性について

同じ素材文で高校1年生から3年生までテストを実施するメリットは、英文の内容の難易度に結果が左右されないことが挙げられるが、一方で、テストに右表のようなヒントを与えることで、学年ごとに読んで書くというタスク自体の難易度が変化するようにした。低学年ではより取り組みやすく、高学年ではより高次の思考力や表現力を求めることがねらいである。

技能統合型テストの学年ごとのヒント

	素材文の内容理解	文の構成	語彙の注釈
1年次	書く前に内容に関する日本語での選択式問題を解く。	‘According to the passage’ などディスコースマーカ―を示す。	一部の語句の意味を日本語で示す。
2年次	なし		
3年次	なし	なし	なし

上記評価規準1～5のそれぞれの判断基準のaを1点、bを2点cを3点、dを4点として、本校で作成した技能統合テストの1年次からの同一生徒の回答について分析を行った（下表）。学年間で大きな値の隔たりがなく、学年を追うごとにどの項目もわずかに値が向上しており、3年次に最終目標とする基準dに達成する割合が高い（全項目平均が3点以上）ことから、指導の成果を確認したり、生徒の学習状況を把握したりするのに役に立つテストであると考えられる。

	評価1	評価2	評価3	評価4	評価5	総点
1年次平均	2.77	2.61	3.58	2.81	3.65	15.42
2年次平均	3.21	2.64	3.68	2.96	3.86	16.36
3年次平均	3.32	3.13	3.84	3.00	3.97	17.26

また普段の授業でもこの評価規準で作文の採点を行ったが、この評価規準は教員間で評価がぶれることがなく、ネイティブでも日本人の教師でも評価しやすい、という意見が得られた。

(2) 学習段階に応じたライティングの到達目標の検討および目標達成のための指導法の共有

評価規準1「英文を読んで、内容を英語で要約できる。」の基準d「話の結論や主張とそれを支える理由がすべて表現されている。」を達成するために以下のような段階的な指導が効果的ではないかと考えた。一方英語力は個人差が大きいため、同じ学年でも授業を実施するクラスの現状を考慮してタスクを取り入れた。またディスコースマーカ―に注目する指導なども加えた。

段階	英文要約を目指したタスクの例	教師が工夫すること
1 st Step (1年生)	・英文の要約の空所補充 ・英文のタイトルの空所補充 ・絵やキーワードをもとに日本語で要約	・教師が要約をして、話の展開や主張の核となるキーワードを3～7点程度挙げる。授業で行う際はその点が網羅されているかをチェックし評価の基準とする。 ・空所は本文のキーワードであるようにする。本文にないキーワードを空所にし、頭文字を出して語を推測させてもよい。
2 nd Step (2年生)	・キーワードを見つけだして日本語で要約 ・絵やキーワードをもとに英語で要約	
3 rd Step (3年生)	・英文のタイトルをつける ・キーワードを見つけだして英語で要約	

自分の意見を書くことは授業で行ってきたが、これまで評価基準が明確ではなかった。前述した評価の5つの評価規準を事前に示して作文を行ったところ、90%以上の生徒が、「評価規準が示されるとその規準を意識して書くことができる」ので「規準が示されない場合と比べて書き方に違いがある」と答えた。評価規準を前もって示した上で、作文の指導を行う方が指導の効果が出やすいと考えられる。

(3) 技能統合型およびアクティブ・ラーニングの要素を取り入れた授業実践

① 学年やコースごとの実践例 (学年ごとに方針を決め取り組み, 実践例などは英語科内で共有した)

研究内容	1 年生	2 年生	3 年生	英語コース (2, 3 年)
技能統合型およびアクティブ・ラーニングの要素を取り入れた授業実践例	各パートの空所を埋め, 内容に関連する生徒自身の考えを簡単な英文で表現する。絵や写真を見て, パートの内容を英語で説明する。(コミュ英 I)	ペアで説明しあったり, 問題を出し合ったりといった活動を取り入れている。英文要約の活動を入れるようにしている。(コミュ英 II)	問題の答えについてタップスの技法を使って, お互いに説明させる。(コミュ英 III)	スピーチ・スキットの発表をする。テーマに沿ってプレゼンテーションを行う。(本年度テーマ例: 国紹介・TPP 問題・エジソンはなぜ偉人になったか)
読んだり聞いたりしたことをもとに書く力を効果的に育成する授業実践例	A L T との Team teaching, ディクティション, モデルを参考に自分に置き換えて自由な発想で文章を書く。(英語表現 I)	英文を読み「あなただったらどう思うか」「なぜ〇〇は～したと思うか」といった質問を投げかけ, 意見交換する。(コミュ英 II)	各章に関連したテーマについて, 発表やスピーチを行う。(コミュ英 III)	洋画を見たりスピーチを聴いたりした後, 感想を発表する。ディベート活動で立論を読みアタックスピーチを作成する。(その後実際にディベートを実施)

② アクティブ・ラーニングにおける協同学習の技法と本校で実施した際の工夫点

技法の種類	生徒の活動	効果があった点	工夫が必要な点
タップス	パートナーに対して, 自分の思考過程を声に出しながら問題を解決する。	文法・語法など答えが1つしかない問いでも, あなたならどうするといったオープンクエスションでも使える。生徒の理解を確かめたり, 意見を整理させたりするのに有効である。	説明の手順やルール (どちらから説明し始めるか決める・この言葉を必ず入れて説明する等) を決めておくとよい。生徒の様子を見て適宜ヒント等与える。
シンク＝ペア＝シェア	少しの間個人で考える。パートナーと話し合いお互いの回答を比較する。その後クラス全体で共有する。	意見交換をすることがわかっていいるため, 発問後に自分でまずは考える姿勢が見られる。スローラーナーもパートナーからヒントをもらうことができる。	最後のシェアは必ず行い, 全体で学習事項の確認をする。日頃から学びあいの雰囲気を作っておくと, 活動がスムーズに行く。
スリー＝ステップ＝インタビュー	ペアでお互いにインタビューし, パートナーから学んだ内容を他のペアに報告する。	ペアで話すときに生徒が注意深く聴こうとする (後で相手の紹介をするため)。授業の最初のスモールトークなどで活用できる。	他のペアに報告する分時間がかかる。最後にクラスシェアを入れると相手の紹介の際人称変化を行っているのかも確認できてよい。
ジグソー	ある話題について知識を学び, 他者にその知識を教える。	自分がグループメンバーに教えるなければならないので, モチベーションが上がる。教える知識を理解して覚えようとする姿勢が見られる。	相手に自分の考えを伝える能力の個人差が大きいいため, タスクのレベルを少し低めに設定した方がうまくいくようだ。
ピア＝エディティング	パートナーが書いたレポートなどを批判的に読んだり, 校正を加えたりする。	生徒の気づきが生まれる。日本語のレポートをチェックする時や一定以上の英語力のある生徒には特に効果的である。	英語力の乏しい生徒は英語の校正をすることが難しい場合が多い。校正のポイントを絞るとよい。

③ 授業実践による成果

アクティブ・ラーニング型授業が成功するためには①生徒の役割を決める (まずは全員参加する), ②活動のルールを明確にして活動に入る (時間を守る, わからないことは尋ねる, 相手の話に相槌をうつ, などをルールに), ③必要に応じてルールを変更・再確認する (よくない言動, いい言動に気づいたらクラスに知らせ軌道修正), ④タスクのレベルを生徒に合わせて調節する (一人でできないけれど難しくすぎてやる気をなくさない程度) の4点が重要であるとわかった。今後も継続して取り組みたい。

6 本研究の成果と今後の課題

技能統合テストの開発により, 本校では何を指導目標とすべきか, またどのような指導が必要か, ということを教師が理解することができた。技能統合型の授業実践を3年間行ったが, 継続して全クラス統一して行うことが今後の課題である。生徒が自信をつけもっと英語を学びたいと思う授業を創造する工夫や, 今回作成した評価規準をもとに生徒の発達に応じた適切な指導ができるように, 今後も努力したい。

音楽科

1 3年間の研究テーマ

アクティブ・ラーニングを取り入れた音楽科学習指導法の研究 ～思考を活性化する学習形態の工夫～

2 研究テーマ設定の理由および研究の目的

音楽科では、基礎・基本を踏まえた、より主体的・協働的な学習活動を実践するために、本研究において、アクティブ・ラーニングを取り入れた学習指導法について研究を深めたいと考える。まず、音楽理論や音楽史、ソルフェージュなど、より主体的な学習を必要とする内容から取り組み、それを基に、生徒間の協働や能動的な学習へと展開していく学習活動を構築していきたい。また、専門学科としての取組や研究が、普通科音楽科の授業へと波及していくことも大きな研究の目的であると考えている。

3 教科研究概要

- (1) 生徒の学力の現状把握とアクティブ・ラーニングを取り入れた授業についての指導法研究
- (2) 学習内容や学年に応じた研究目標の設定
- (3) アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の研究とまとめ

4 教科における3年間の研究構想

1年目	【教科研究概要】 <ul style="list-style-type: none">○ 生徒の現状を踏まえた研究課題の調査と分析○ アクティブ・ラーニングについての調査研究
	【具体的研究内容】 <ul style="list-style-type: none">・ 生徒の現状把握と、研究テーマを明確にするための課題研究・ 専門学科としてアクティブ・ラーニングを導入するための具体的実践例研究
2年目	【教科研究概要】 <ul style="list-style-type: none">○ 前年度の研究を生かした主体的・協働的な活動を取り入れた授業実践○ 能動的な学習場面設定と実践的な指導法についての研究
	【具体的研究内容】 <ul style="list-style-type: none">・ 学年や学習内容に応じたアクティブ・ラーニングの導入・ 生徒同士の気づきを生かした効果的な学習形態の研究
3年目	【教科研究概要】 <ul style="list-style-type: none">○ アクティブ・ラーニングの実践を通して得た授業実践のまとめ○ 3年間の研究のまとめ
	【具体的研究内容】 <ul style="list-style-type: none">・ 授業実践で得られた研究成果についての検証・ 研究のまとめや今後の研究への課題提起

5 本年度の実際

3年間の研究を通して、課題研究や専門学科としてアクティブ・ラーニングを導入するための具体的実践の研究を行った。本年度は、まとめの年度として、学年や学習内容に応じたアクティブ・ラーニングの導入をさらに深め、生徒同士の気付きを生かした効果的な学習ができるよう取り組んだ。

前年度は「音楽史」の授業で、ウィーンとザルツブルグを訪問する海外研修旅行のための、事前学習の資料を作成した。又、生徒2～3人でグループを作り、調べたいことを挙げ、ウィーンやザルツブルグに関する資料などを研究しまとめ、発表を行った。研修旅行で必要なことについて、1学期に学習してきた音楽史の流れに沿い、訪問する国の時代背景、歴史や文化の成り立ち、その文化から生まれてきた「音楽」について、生徒たちの興味・関心に基づき学習を進めた。

研修旅行を終え、本年度、当該生徒達は3年生になり、専攻の実技の専門性を深めるとともに、研修旅行で学んできたことを十分に学習に生かし、より音楽に対して主体的に表現するようになり表現の幅も広がった。アクティブ・ラーニングに取り組んだ成果としては、表現力がより豊かになったことで、多くの演奏をする機会を得るようになった。又、鹿児島県の代表として、全国的な大会や演奏会で発表の機会を多く得ることにつながったのは、音楽科としての大きな学習の成果の表れともいえる。

本年度は卒業試験で演奏する曲の作品を分析し、研究を深め、相互に報告するという学習に取り組んでいるところである。作品の背景、歴史、経緯などを生徒自身が研究することで、より音楽の解釈が深まり、演奏の形式を理解することにつながっていると考える。

今年度、研修旅行に参加する2年生も、「音楽史」の授業を通して、ウィーンやザルツブルグへの事前学習に懸命に取り組んでいる。このように研修の成果が年々深まっていくことは、音楽科、ひいては学校全体の学習へのより能動的な取組につながり、生徒達の学習への取り組みもより活性化していくと考える。

6 研究の成果と課題

本年度は研究の完成年度として、アクティブ・ラーニングの実践を通して得た授業実践のまとめに取り組んだ。研修旅行の事前学習、事後学習を通して、より実際の研修の価値をより高めるものになり、表現のより確実な根拠となるような知識の習得につながったと考える。自主的・協働的な取組が実践されており、より活発な学習活動が行われた。

今後の課題としては、「学び」は生涯をかけて行われるものであり、今後の自分を高めていこうとする生涯を通した取り組みを続けていくよう生徒達を支援し続けていくことが大切であると考えている。

美術科

1 3年間の研究テーマ

アクティブ・ラーニングを取り入れた美術科学習指導法の研究 ～表現及び鑑賞の学習に言語表現を取り入れた学習形態の工夫～

2 研究テーマ設定の理由及び研究の目的

美術科では、表現及び鑑賞の学習において、より主体的・協働的な学習活動を実践するために、本研究において、アクティブ・ラーニングを取り入れた学習指導法について研究を深めてきた。

まず、全学年共通の取組として、「素描」における基礎的・基本的事項について生徒の実態を把握し、アクティブ・ラーニングを取り入れた学習活動を行ったところ、生徒が客観的に現状を把握し、相互に問題点やより効果的な方法について指摘し合い、課題を見付け、克服していくといった能動的な学習姿勢を促す効果が見られた。そこで、描写の正確さに観点を置くと評価基準が示しやすい「素描」の学習からさらに、評価の観点が「コンセプト」や「形」、「絵肌」といった観点で多面的に捉えられる「絵画制作」の学習に発展させ、相互の判断基準の共有や、多面的な課題克服の方法の選択における効果的な指導法について研究を行った。特に第1学年の生徒は、制作活動の経験が浅く美術作品の良さについての基準が曖昧なため、こういった問題点をどのように克服させればよいか考察を深めていく必要があると考える。また、生徒が自分の考えを伝え、お互いの制作や意見に対しよりよく批評し合うことができるよう、言語表現を取り入れた学習形態の工夫が必要であると考え、研究を進めてきた。

本研究を通し、最終的には生徒が作品と向き合い思考錯誤する中で、創造的な技能が一層高まるよう言語表現を用い、より主体的・協働的に他者と学び合う力や制作に向かう姿勢を身に付けることを期待し、この研究テーマを設定した。

3 教科研究概要

- (1) 生徒の「素描」についての基礎的・基本的事項についての実態把握
- (2) アクティブ・ラーニングを取り入れた学習指導法研究
- (3) 表現及び鑑賞の学習における言語表現を取り入れた学習形態の工夫
- (4) アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の研究とまとめ

4 教科における3年間の研究構想（案）

1年目	【教科研究概要】 <ul style="list-style-type: none">○ 生徒の現状を踏まえた素描を中心とした研究課題の調査と分析○ アクティブ・ラーニングについての調査研究及び検証授業の実施
	【具体的研究内容】 <ul style="list-style-type: none">・ 素描についての生徒の現状把握と、研究テーマを明確にするための課題研究・ 専門学科としてアクティブ・ラーニングを導入するための具体的実践例研究及び実践
2年目	【教科研究概要】 <ul style="list-style-type: none">○ 題材や生徒の学習状況に合わせたアクティブ・ラーニングの研究○ 造形的要素や思いを言語化することや学習形態についての調査研究
	【具体的研究内容】 <ul style="list-style-type: none">・ 複数の題材や学習形態におけるアクティブ・ラーニングの効果を研究・ 生徒同士の気づきを生かし、効果的に言語表現させる学習形態の研究
3年目	【教科研究概要】 <ul style="list-style-type: none">○ 言語表現を取り入れ学習形態を工夫した授業の実践及び生徒の変容のまとめ○ アクティブ・ラーニングを取り入れた美術科学習指導法の研究のまとめ
	【具体的研究内容】 <ul style="list-style-type: none">・ 授業実践で得られた研究成果についての検証・ 研究のまとめや今後の研究への課題提起

5 本年度の実際

1年目は、「素描」の授業を中心に研究を行い、協働学習を軸としてグループごとに共通課題を見つけ、課題克服を目指す授業の中にアクティブ・ラーニングを取り入れた。実際に目に見えて生徒自身が活動的になり、各自の達成感も得られていた。しかしながら、「素描」では生徒の主体的な表現にまで広がらないという課題が残った。そこで2年目は、「素描」だけでなく「絵画」の授業においてもアクティブ・ラーニングを取り入れ、生徒が構図や主題、技法といった部分において能動的に選択し、主体的に制作を行うことが課題解決に繋がっていくことを期待して授業展開を行った。実際には、自ら主題や制作方法を選択することにより制作意欲は高まり、多視点での対話が行われたことによる効果はあったものの、課題の難易度の設定を各自に委ねたため、各自の力に合った適切な選択がされず、達成度において若干の差ができてしまう結果となった。

そこで今年度は、2年間の研究の成果と課題をふまえ、より一層生徒が主体性を高め、適切な選択を行い、生徒間での対話を活発に行いやすい点を考慮し、再び「素描」の授業においてアクティブ・ラーニング型の学習指導を行うこととした。1年目、2年目共にグループ協議を中心とした生徒の動きが見える形での授業展開であったので、本年度は、グループ協議等の見える活動を設定するのではなく、生徒が自主的に語り合う、自然な形でのアクティブ・ラーニングができるようにした。特に第2・3学年については、授業自体を合同で行い、各自の制作意欲にも注目しながら研究を行うこととした。

【各学年の取り組み】

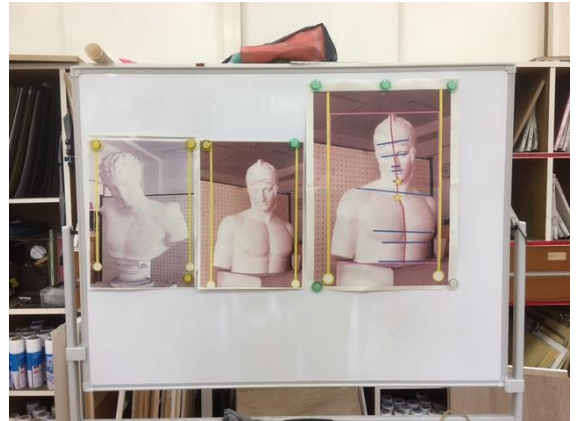
学年	題 材	学習形態	主な学習内容	学習指導の工夫
1	科目名【素描】 「何をどう見てどう描くか」(素描)	個人	・テーマに基づき素描を進める。	・制作中に課題を見付けるように指示する。
		グループ	・モチーフを見て描いた感想をグループで話し合う。 ・どのような見方や描き方をすればよいか話し合ってから描く。	・個別の制作から感じたことをグループ活動に発展させる。 ・各グループの発表をもとに全体の活動に発展させる。
		全体	・見方や描き方について整理したことを言葉にした上で、あえてモチーフを見ずに描くことでそのことを検証する。	・「言葉」にすることを重視し、課題や解決策について整理させ、具体的に理解させる。
2	科目名【素描】 ※各自で選択したモチーフを素描する	個人	・モチーフを各自で選択し、制作を進める。	・2・3年生の合同で授業を行う。 ・あえて授業の前後に話し合いの時間を設けず、必要な時に話し合えるようにする。
グループ又は全体		・異学年の生徒がお互いに作品を鑑賞しながら課題を見つけ、お互いに解決策を出し合い、試行錯誤しながら制作を進めていく。	・各自が先輩・後輩の作品を鑑賞しながら課題を見つけ、お互いに協議したり、賞賛したりしながら課題解決を行っていく。	

新しい表現手法を学ぶ場合や、生徒の表現上の課題について全体的に指導する場合、また鑑賞活動において、様々な表現されたものについて意見を交流させる場面においては、新しい視点や、多視点での対話に価値があるので、意図的な話し合いの場の設定が多く必要であると考えられる。しかしながら、主体的に制作活動を進めたい生徒の表現意欲を止め、授業の中で改めて全体で話し合う場を設定することに教師も生徒も若干の違和感を覚えていた。

そこで授業では、あえて話し合いの場を設定せず、生徒に、自分たちが必要な時に必要な内容について話し合うアクティブ・ラーニングの大切さについて指導し、授業を行った。

第1学年の「素描」の学習においては、入学以来、石膏デッサンの制作を中心に進めてきた。アンケートによる意識調査によると「素描」の時間が楽しいと感じているものがほとんどである一方で、「素描」が上手くいっていると感じている者の割合は少ない。そこで2学期の素描の学習から生徒を1学期の制作状況をもとに平均化したグループを作成し、グループ学習の形態での制作活動を導入し、それぞれが抱えている制作上の課題や気持ちを共有して学習を進める工夫をしている。

第2・3学年の授業においては、合同クラスが今年度初めてということもあり、生徒自身も戸惑いが見られた。特にモチーフの選択においては、先輩への気遣いのためか、後輩が積極的に描きたいものを選択できないことがあり、制作以外の作業に時間を要する場面もあった。しかし、制作における集中力や、積極性においては、これまでの授業に比べ目に見える形で変化が現れ、作品も密度の上でかなり充実している作品が多くなっていった。さらに、授業中に上手いかなかった生徒が、次回の授業までに名誉挽回を図ろうと休み時間に制作を行うといった場面も多く見られ、生徒の「素描」に対する姿勢が明らかに変化しているのが分かった。そして、授業中ではあえて話し合いの場面を設けなかったが、生徒間においてお互いの作品について授業時間以外でも協議し合ったり、先輩が後輩の作品を賞賛したりするような場面も見られ、自身の作品の評価と達成度の確認を言語において行い、さらに技法の理解と習得も行うといった高次の学習場面を垣間見ることもできた。

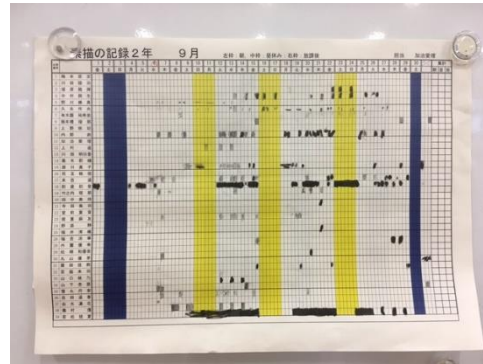


①

②



③



④

- ①第1学年グループ目標揭示
- ②第1学年全体教授内容揭示
- ③第2学年全体教授内容揭示
- ④第2学年素描の記録拡大
- ⑤第3学年入試合格作品揭示



⑤

【アクティブ・ラーニングを促す掲示物の工夫について】

①は、第一学年が、制作を始める前にグループで話し合った目標を共有するために石膏台の下に掲示し、常に意識しながら制作を行うためのもの。②は全体で共有する構図についてのヒント。④は第2学年がクラス内での制作時間と作品の密度や習熟度の関係を各自が意識するための「素描の記録」。⑤は第3学年が大学の参考作品の確認や合格した卒業生の達成レベルを確認し、自分の課題を見つけるためのもの。それぞれの学年で習熟度のレベルや目標が異なるため、それぞれの目標に応じた掲示を行い、課題の確認や制作意欲の向上を行った。

6 研究の成果と課題

第1学年の授業においては、生徒はグループ内でお互いに刺激を受けながら積極的に素描に取り組んでおり、成果を感じつつある。一方で、生徒の理解度については具体的に自覚できていないことや、その目的を理解し始めたことで、自分たちにはまだまだたくさんの課題があるのだということにも気づき始めている現状である。今後は、通常の石膏デッサンの制作を進める授業を一旦止め、自分たちの課題について整理し、どのように表現すれば良いかについて改めてよく考え、話し合う学習活動を行い、その中で主体的に課題解決に当たれるようにしたい。

第2・3学年の生徒については、今回の授業形態についてアンケート調査を行ったところ、第3学年は約40%、第2学年は約60%の生徒が何らかの成果を感じていた。特に2年生は、先輩に気を遣うものの制作に関しては先輩の制作過程を確認しながら見通しや目標をもって落ち着いて取り組めたため、成果が高かった。意図的なグループ協議を実施しなかったが、協議による成果の期待も高いので、KJ法などを適宜取り入れるなど、協議が円滑に進むような手立てを取りながら今後の展開を図りたい。

アクティブ・ラーニングは、実技教科において当然のように導入している部分もあるが、授業形態や展開、使用するツールといった点でまだまだ研究すべき部分はたくさんあるように思う。例えば、①授業の展開部分で意図的に生徒を動かす点と、②単元全体での興味・関心や制作意欲を高めるといった授業の構成や、③教室内の掲示・板書や机・椅子の配置を配慮する点の3つを程よく構成していくことが、生徒をアクティブにする重要な鍵になると考えられる。したがって、教科内にとどまらず、学年間、さらには、学校全体をとおして取り組むことでより効果を発揮する教授法であると考えられる。

ヨーロッパ海外修学旅行を終えて

音楽科引率 立石 純也

音楽科のヨーロッパ海外修学旅行は、昨年12月4日から9日までの5泊6日で計画され実施の予定であったが、飛行機のトラブルがあり、結果7泊8日の行程となった。生徒はウィーン4日、ザルツブルクとミュンヘンと東京でそれぞれ1日ずつの日程で研修を行った。

12月4日（月） 鹿児島→東京（羽田）→ミュンヘン→ウィーン

天候：晴れ

6時40分、鹿児島空港集合。ほとんどの生徒が初めての海外であり、中には初めて飛行機に乗るといふ生徒もいて全員がハイテンションである。今回は添乗員さんのご配慮で鹿児島空港でのウィーンまでの手続きが大変スムーズであった。チェックイン後、見送りにお越しいただいた保護者への生徒代表のあいさつを済ませ、鹿児島を出発となった。



2時間弱のフライトの後、羽田に到着。出国手続きなど、生徒たちにとっては、初めて体験することばかりだったが、特に混乱もなく搭乗できた。

約12時間のフライトは、あっという間に過ぎミュンヘンへ空港に到着。乗り継ぎの待ち時間のあいだに早速売店で買い物をする生徒が見られた。緊張の入国審査を終えて、ウィーン行きの航空機に乗り込む。ウィーン到着後、一人の生徒の荷物がウィーンに届いていないことが判明。ミュンヘンに置き去りになったようで明日の朝にホテルに届くとのこと。その後、バスに乗り換えホテルへホテル到着。ロビーで諸注意を行い、それぞれの部屋へと分かれた。長い1日目が終了した。

12月5日（火） ウィーン

天候：曇り時々雪



全員元気に朝食を取った後、バスに乗ってレッスン会場に移動。住宅街の一角にあるこのホールで、今回の研修の中でも特に重要なノーマン・シェトラ教授のピアノレッスンが行われた。受講するのは2名のピアノ専攻の生徒で、残りの生徒は聴講という形態である。

氏のレッスンは、「聴衆に魔法をかけるような演奏するために、どの様に楽譜を読み解き演奏していくのか」という内容で、特に「音色」と「表現」の重要性について熱く語っておられた。生徒達は楽譜に書かれている約束事を守りつつ、自分の思う表現をすることの難しさを感じているようだった。80歳を過ぎておられるにもかかわらず、時間を忘れてのレッスンに加え、最後にドビュッシー作曲の「子供の領分」を演奏してくださった。ピアノの音のあまりの美しさに全員が感激。とにかく感動の一言に尽きるレッスンであった。



ホールでランチボックスの昼食をとり、ハイリゲンシュタットにバスで向かった。ハイリゲンシュタットはベートーヴェンが過ごした場所であると同時に、甥であるカールと弟のヨハンに宛てに、日ごとに悪化する難聴への絶望と、芸術家としての運命を全うするために肉体および精神的な病気を克服したいという決意を書いた手紙「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いた場所である。彼のデスマスクや遺髪などを目の当たりにした生徒達は、「ここにベートーヴェンがいたのだ」という感慨に浸っていた。

ホテルに戻りウィーンで初めての夕食。ほとんどの生徒が初めての本格的な外国の食事である。ジャガイモの量と大きさと味付けに最初から手をつけない生徒も見られた。

夕食後、ウィーン国立歌劇場へと向かう。ここでリヒャルトシュトラウス作曲の「エレクトラ」を鑑賞する。日本では公演されることが少ない作品ではあったが、オーケストラの音楽に導かれる美しい歌声、豪華な衣装や舞台装置に、終演後の生徒たちは興奮状態であった。終演後は口々に印象に残ったシーンや音楽について語り合っていた。2日目にして大変中味の濃い研修となった。

行ってその空気を味わって演奏するのは、これから演奏する上で大きな支えとなった気がする。



12月8日(水) ウィーン

天候；曇り



オペラの鑑賞で夜が遅かったが。この日の朝食も全員元気になることが出来た。

バスに乗り、ベートーヴェン、シューベルト、ブラームスなど、多くの作曲家が眠る中央墓地を訪れる。ベートーヴェンの墓石の前には、綺麗な花が手向けられている。

その後、分離派会館で絵画などの作品に触れる。生徒も興味深そうに鑑賞していた。

レストランで昼食の後、昨夜オペラを鑑賞したウィーン国立歌劇場のバックステージを見学。

ウィーン国立歌劇場を後にし、次にシェーンブルン宮殿を訪れる。夕刻時、目の前に広がる広大な宮殿に生徒達も興奮気味であった。マリア・テレジア、マリー・アントワネット、ナポレオンと、世界史で学習した人々が実際に過ごしていた宮殿。宮殿の広さもさることながら、壁に飾られた絵画や調度品の素晴らしさ、交通の不便だった時代に、よくここまで集めたなと思う中国の陶磁器や日本の漆器など、当時の栄華を堪能する。

宮殿を後にして夕食前に市庁舎前のクリスマス・マーケットでしばし自由時間を楽しんだ。生徒達は今回の研修中、数少ない自由な時間を十分に楽しんでいるようだった。

夕食後、ホテルへ戻りゆっくりとした時間を過ごすことが出来た。

12月9日(水) ウィーン→ザルツブルク

天候；晴れ

ウィーンでの最終日。グラスナー教授の合唱レッスンを受けるため、ケルトナー通り近くにあるウィーン国立音大を訪ねる。体をほぐす運動に始まり基本的な発声を終えると、鹿児島で準備してきた3声のカノンとモーツアルトの作品などをレッスンしていただいた。ときにユーモアを交えながらの心温まる氏のレッスンの受講をとおして、生徒全員がグラスナー教授のファンになっていた。





レッスンの後、ケルトナー通りで各自昼食と買い物を楽しんだ。旧市内中心部にあるシュテファン大聖堂を起点に、南側はシュターツ・オパーまで伸びる通りで、数多くのブランドショップが立ち並ぶウィーンで一番の繁華街である。

その後、再集合してシュテファン大聖堂を見学し、バスでザルツブルクを目指した。

4時間をかけてザルツブルクに到着。ウィーンくらべて落ち着いた佇まいのホテルにチェックインして夕食。疲労からか食事があまり進まない生徒が見受けられた。

12月10日（金） ザルツブルク→ミュンヘン
天候：小雨のち雪



朝、朝食の前に買い物を希望する生徒と一緒にスーパーに出かけたが休日前ということで開店時間がお昼前からということで断念。朝食には2名の生徒が寝坊で遅刻してきたが、全員元気にホテルを後にしてバスで目的地へ出発した。

バスを降り、最初にミラベル庭園を見学した。ここは、ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」のロケ地ということもあり、様々な場所で記念撮影後、モーツァルトの生家を訪ねる。

ザルツブルクの旧市街にあるこの家は、モーツァルトが実際に使用していた楽器や楽譜も展示している記念館となっている。彼が立っていたその場所に自分が立っている、彼が使っていた楽器がそこにある、本物を目の当たりにして、生徒たちは大変感激している様子だった。

午後から雨が降り出し、バスでザルツブルクを出発する頃には雨が雪に変わり始めていた。

3時間半をかけてミュンヘン空港に到着。出国手続きを済ませ、生徒は出発を待つあいだ最後のユーロ紙幣を使い切るために買い物を楽しんでいたら、ここからとんだハプニングが発生。

20時出発予定の飛行機が、着陸の際に落雷を受けて整備点検を行ったが安全に飛行できるか判断しかねるというような理由で突如欠航が決定。添乗員が冷静に航空会社と対応くださり、ミュンヘン空港近くのホテルとホテルまでのタクシーの手配を済ませてくださり、数台のタクシーに分散してホテルへ向かった。

ホテルのロビーは同じ便で足止めを食った他の乗客と一緒に混雑していたが無事チェックインを済ませてホテルで遅い夕食を取った。疲れと突然の延泊で具合の悪い生徒が出たがたいしたこともなく生徒は各部屋に戻り床についた。

そこから職員団と添乗員で明日の行動と日本への帰国の段取りについて協議した。日本の航空会社や旅行会社とのやりとりになったため、深夜2時過ぎの就寝となった。



12月11日（土） ミュンヘン→日本（羽田）
天候：曇り

遅めの朝食を終えて9時半に生徒全員をロビーに集めた。ミュンヘンでの研修も考えたが生徒の安全面を考慮し、お昼までホテルの各自の部屋で過ごし、昼食後ホテルを出発して空港で待機することを伝えた。生徒は落ち着いたようで指示を聞き入った。恐らくホテルのWi-Fiが有効なので時間をもてあますようなことはなかったのではないかと思う。



ホテルで昼食を済ませてタクシーで空港へ向かう。14時に空港到着後、入国手続きまで自由行動となった。空港前でもクリスマス市場が開かれていて生徒たちもゆっくりとした時間を過ごすことが出来たようだ。また、日本到着後も日曜日で、羽田から鹿児島への飛行機の予約が取れずに羽田での宿泊も決定していたので、なんだか生徒にも余裕が感じられた。

この日は無事に飛行機の搭乗することができたが、前日の飛行機の欠航の影響で満席のため生徒は離ればなれと12時間の機内を過ごすことになった。

12月10日(日) 日本(羽田)

天候：晴れ

12時間のフライトの後、無事日本へ到着。関税で入国手続きを済ませて、羽田空港に隣接するホテルにチェックイン。まだ夕方の6時までだったがホテルが用意してくださった夕食をいただいた。やはり日本の食事は美味しいようで生徒も元気に食事を済ませた。夕食後、各部屋に分かれ就寝となった。



12月11日(月) 羽田→鹿児島

天候：晴れ

朝食を済ませて7時30分にホテルをチェックアウト。そのまま歩いて保安検査場を通過してロビーで出発を待った。前日、鹿児島空港でトラブルがあったようで9時出発の飛行機が30分遅れるというインフォメーション。もうここまで来るとこれくらいの遅れも気にはならない。

12時前に鹿児島空港へ到着。多くの保護者の方にお迎えに来ていただいた。無事に生徒連れて帰ってこられて本当によかったとやっとホッとした思いがした。



お世話になった添乗員さんにお礼の意味を込めて松陽高校の校歌を空港のロビーで歌った。向かいにいられていた保護者の方も無事に帰ってきた生徒の姿を見て涙されていた方多かった。

この研修で生徒たちは数多くの感動体験を通じて大きな成長を遂げることができたと感じている。その成長の過程が手に取るように実感できたことは、引率した私たちにとって何よりも喜びであった。将来、再びヨーロッパの地で音楽を学びたいと強く心に誓った生徒もおり、帰国後は黙々と練習に取り組む生徒が以前よりも増えたように感じられる。また、芸術を学ぶ我々にとって、西洋の芸術や文化にのみならず、自国の文化にももっと精通する必要があると強く感じた生徒も多くいたようである。

ヨーロッパ海外修学旅行は生徒たちにとって一生忘れることのない思い出として、そして今後の演奏活動における糧となることと思う。この経験を今後の活動に生かすとともに、より充実した有意義な高校生活を送ってもらいたいものだと強く願っている

平成29年度普通科修学旅行 報告

2学年主任 田原 辰也

1 はじめに

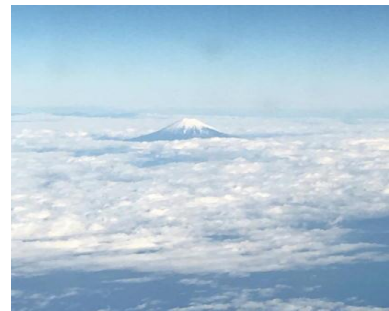
2学年普通科は、平成29年12月6日（水）から12月9日（土）までの3泊4日、長野県志賀高原でのスキー研修を中心とする修学旅行を実施した。参加者は、普通科生徒232名（男子112名、女子120名）、団長（大津事務長）以下引率職員9名（男性7名・女性2名）、添乗員4名（男性2名・女性2名）、カメラマン1名（男性）、看護師1名（女性）の計247名である。

研修日程にもとづいて、その概要をここに報告する。

2 旅行の実際

1日目 12月6日（水）

- 6時10分 鹿児島中央駅西口，松陽高校をそれぞれ出発
集合は、両出発地とも6時には完了。ほぼ同時刻に出発できた。
- 6時50分 鹿児島空港 到着
搭乗券配布，添乗員による荷物預け等についての説明の後，搭乗手続きを各自済ませる。この間，何もトラブル無し。
- 8時05分 鹿児島空港 出発
離陸時，歓声上がるが，機内では静かに過ごせた。
富士山もきれいに見えた。
- 9時40分 羽田空港 到着
- 10時30分 羽田空港 出発
「東京」の説明を聞きながら，ガイドさんの説明がわかりやすかったとの意見多数あり。
- 16時30分 硯川ホテル 到着
- 17時00分 スキー講習（スキー開校式）
- 19時00分 夕食



スキー教室の開校式の様子です。この日は雪に慣れることを目的に練習を行いました。



- 20時00分 入浴
- 22時15分 班長会（地下1F大広間で）
- 22時45分 点呼後消灯

女子の部屋風呂で，お湯の出が悪かった以外，ほとんどトラブルも体調不良者もなく，旅行初日を無事終わられた。

2日目 12月7日(木)

- 7時00分 起床
- 7時30分 朝食
- 8時30分 クラス写真撮影
- 9時00分 スキー講習(午前の部)
- 11時00分 昼食・休憩
- 13時00分 スキー講習(午後の部)
- 17時00分 スキー閉校式 → 入浴
- 19時30分 夕食
- 21時30分 班長会(地下1F大広間で)
- 22時30分 点呼後消灯



早朝から快晴だった。足を痛めた生徒が若干いたがほぼ全員が午後には滑れるようになっていた。スキー不参加者の長野観光も充実していた。ほとんどの生徒が、スキーに大満足した研修だった。

生徒の感想

<スキー>

すごくよかった よかった あまり良くなかった 悪い

- ・雪に感動した。2日目の午後には滑れるようになった。また、スキーを是非したいと思った。
- ・スキーをする前は滑れるか不安だらけだったけど、優しいインストラクターさんと友だちのおかげですごく楽しかった。
- ・インストラクターの方について
 - 親切で、優しく教えてくださった。教え方が丁寧でわかりやすかった。
 - 滑れるようになって、大変感謝している。
- ・リフトが途中で止まって、怖すぎた。
- ・スキーができなかった生徒は...長野観光も良かった。ソリができて良かった。

<硯川ホテル>

すごくよかった よかった あまり良くなかった 悪い

- ・大人数の部屋で楽しかった。友だちとワイワイできた。
- ・普段あまり親しくない友人と同じ部屋になって、たくさん語り合っとうれしかった。
- ・普段話さない友人と話す良い機会だった。
- ・大浴場が温泉で気持ちよかった。朝風呂も入れた。
- ・暖房が効いていて暖かかった。館内そして部屋の中まで硫黄のにおいがしてきつかった。
- ・ドライヤーが少なく、女子は大混雑だった。

3日目 12月8日(金)

- 6時30分 起床
- 7時00分 朝食
- 8時00分 ホテル発



(朝食の様子)



ディズニーリゾートまでの車中は、行きと同様、各クラス、友人の会話やカラオケで盛り上がっていたようです。

小雪の舞うなか、硯川ホテルを出発。三日間お世話になりました。ありがとうございました

生徒の感想 (バス車中)

- ・友だちとの会話やカラオケで長い旅も楽しく過ごせた。
- ・クラスの仲間との絆が深まった。
- ・ガイドさんの説明が良かった。わかりやすい説明だった。

○ 12時45分 ディズニーリゾート 到着



○ 21時30分 生徒は各自ホテルに帰着

- ・今回は、ディズニーシーとディズニーランド、どちらかを選ばせた。結果は、
ランド...35名 シー...157名
- ・例年より、ディズニーの滞在時間を長くとった。満足した生徒は多かった。
- ・早い生徒は19時過ぎにはホテルに帰ってきた。1グループがホテルを間違えた以外、ほぼ時間内に全生徒が無事ホテルに帰還。
- ・食事は昼食、夕食ともディズニーでとった。

生徒の感想 (ディズニー) **すごくよかった** よかった あまり良くなかった 悪い

- ・初の夢の国, すごく楽しくって, 帰りたくないってすごく思いました。
- ・7時間以上, アトラクションもたくさん乗れて大満足。
- ・友だちと行くディズニーは楽しかった。友だちと絆を深められた。
- ・もっといたかった。時間が足らなかった。
- ・シーに行けて良かった。ミールクーポンが良かった。

○ 23時00分 点呼後消灯

生徒の感想 (ヒルトン東京ベイ) **すごくよかった** よかった あまり良くなかった 悪い

- ・ディズニーの余韻をホテルで味わうことができ幸せでした。
- ・ディズニーの余韻でなかなか寝付けなかった。
- ・眺望が良し。朝, 富士山がきれいに見えた。
- ・部屋がとてもきれいで快適だった。
- ・こんなきれいなホテルに泊まったのは, 生まれて初めて。
- ・1泊では物足りない。もっと泊まりたかった。
- ・朝ご飯がとてもおいしかった。
- ・ホテルの人の対応や部屋・設備などとても良かった。

4日目 12月9日(土) (浅草) ...各自散策 → クラス写真撮影

- 6時30分 起床
- 7時00分 朝食
- 8時45分 ヒルトン東京ベイホテル出発
- 9時15分 浅草 (~10:15)

浅草を1時間弱自由に散策。
本殿参拝, 仲見世通りでの食
べ歩きや雷門前で, 外国人観
光客と仲良く写真を撮ったり,
充実した時間を過ごした。



生徒の感想 (浅草) **すごくよかった** よかった あまり良くなかった 悪い

- ・食歩き, おみくじ, 五重塔, 雷門, 浅草から見るスカイツリー...みんなで回って楽しかった。
- ・おいしかったもの...メロンパン メンチカツ (浅草メンチ) あげまんじゅう 大福餅...
- ・外国人観光客と仲良くなった。家族へのお土産も買えた。

4日目 12月9日(土) (上野) ...各自散策・各自昼食

○ 10時30分 上野



生徒の感想 (上野) すごくよかった よかった あまり良くなかった 悪い

- ・自由に東京間を味わえた。都会を知った。人の多さにびっくりした。外国人が多くいて驚いた。
- ・自分たちの足で上野を散策できた。
- ・もっと計画を立てて回れば良かった。無計画を反省している。
- ・行ったところ...○西郷銅像 ○下町風俗資料館 ○国立博物館 ○国立科学館 ○上野動物園
○旧岩崎邸 ○縁結び神社 ○アメ横
- ・自分たちで好きなものを食べられて良かった。...タイ料理 ケバブ 小籠包 イチゴとアサート
パフェ 韓国料理 赤から鍋 ピザ パスタ...
- ・ほとんどアメ横で過ごした。いろんな店に行けて楽しかった。

○ 14時20分 上野出発

○ 15時20分 羽田空港 到着 修学旅行解団式

○ 16時40分 羽田空港 出発

○ 18時45分 鹿児島空港 到着

○ 19時10分 鹿児島空港 出発

○ 20時00分頃 鹿児島中央駅西口・学校 各到着 →解散



旅行中、重篤な体調不良者は1人も出ず、無事全日程を終えることができた。
天候にも恵まれ、充実したスキー研修・グループ研修を終えることができた。

3 修学旅行による生徒の成長

「修学旅行で生徒がどういう成果を得られたか」を知るために、実施後アンケートの項目に、「**修学旅行を通して、自分の成長した点・反省すべき点について書こう**」という項目を入れてみた。その結果、多かった項目が2つあった。1つは「自主性・自律性」に関するもの。もう1つは、「対人関係・集団行動」に関するものであった。

まず、「自主性・自律性」に関する項目について、下はその抜粋である。

- ・時間をみて自主的に行動するようになった。
- ・時間管理が自主的にできた。時間を考えて行動することができるようになった。
- ・（上野で）行動の時間配分を自分たちで考えて行動することができた。
- ・計画を立て、先のことを考えて行動できるようになった。
- ・荷物の整理整頓をきちんとできた。
- ・お金の管理や使い方が自分なりにうまくできた。

本学年が1年次から掲げている第1の学年目標は、「自己管理能力を育成を図る」ことである。

- 1) 自己管理能力を育成を図る
 - ① 健康管理に努めさせる。…十分な睡眠と栄養バランスのとれた食事、病気やケガの治療
 - ② 時間管理に努めさせる。…1分前着席の徹底、集合時間・提出期限の徹底
 - ③ 目標を明確化させる。…日常生活・テスト・部活動などの目標を具体的に設定する。
 - ④ 感情のコントロールに努めさせる。
 - ⑤ きまりを遵守させる。

(平成29年度2学年目標より抜粋)

この目標を考慮しながら、今回の修学旅行では、「生徒の自主・自律性を育てる」ことに力点を置いて計画した。これまでと大きく異なる点は、最終日に「上野自由散策」を入れたことである。そのために、班編制から行動計画を立てるまで実質3時間をあて、下の内容に従って、事前準備を行わせた。

「上野」事前学習 ...□各自（各チーム）で情報入手 ※1チーム（3～5人）	
・上野公園地域のみ ・徒歩のみで移動。 ・時間に余裕を持って計画を立てる。	↓
	□「行動プラン」を作成する（フリースタイル）→担任提出 □メンバー紹介 □時間と場所 □各場所の View Point & Check Point □ルートマップ作成 □集合時刻...（ ）

(担任会での打ち合わせ資料より)

他にも、部屋割りを生徒に決めさせたり（これまでは名簿順だった）、ディズニーにシーとランドの選択を取り入れたりするなど、小さいことではあるが、生徒の自主性を尊重する内容を行程に盛り込んでみた。その結果であるが、修学旅行後の生徒アンケートをみると、今回の修学旅行を通して、「自主性・自律性」を育て、学年目標の「自己管理能力の育成」に与ることができたと言える。

次に「対人関係・集団行動」に関する項目についてである。下はその抜粋である。

- ・相手を思いやり、気遣うことができるようになった。
- ・人の気持ちを考えて行動するようになった。
- ・友人と協力・協調して行動することができた。
- ・思ったことを口に出さない、言いたいことを我慢する。
- ・家族ではない人たちと生活したことで、他人に合わせて行動することの大切さを学んだ。
- ・周りを見て行動することができるようになった。
- ・コミュニケーション能力が高められた。
- ・友情を深められた。
- ・普段話さない人とも話すことができ、仲を深めることができた。

生徒感想の中にもあったが、「家族以外の人間」と生活を共にすることで、今まであまり気に留めていなかった人間関係の「機微」に気付かされた生徒が多かったようである。また、雪山や初めての大きな町での単独行動は危険であることを実感することで「集団行動」や「他との協力・協調性」の必要性を知ったのかもしれない。

以上が修学旅行を通して生徒自身が成長したと感じた主な内容である。2学年最大の行事である修学旅行によって、楽しい思い出とともに、初めてのことを数多く経験できたようである。この経験が今後の高校生活の支えになることを期待したい。

最後に、「生徒の思い出」を掲載して、この報告を終わりたい。

ディズニーが1番思い出に残っています。初めてディズニーに行って、大好きな友だちとも回る事ができて大満足でした。タワーオブテラーという乗り物がすごく怖かったです。心臓バクバクで、けどすごく楽しかったです。大好きなディズニーキャラクターのグッズも買えてパレードも見れて、たくさん写真も撮れて幸せでした。

浅草では普段あまり話さない男子や女子と写真を撮ることもできました。クラスの絆も深まった気がします。このクラスもあと少しだけど、一緒に最高の思い出を作ることができて本当に良かったです。

(女子)

1番の思い出はスキーでした。まず、山に降り積もった雪がとてもきれいで感動しました。スキーは初めてだったけど、一日中練習してうまく滑れるようになって良かったです。滑れるようになってからは、速く滑りたくて思わずスピードを上げてしまって、こけたりぶつかりそうにはなりましたが、ケガなく過ごせたので良かったです。

東京の景色をバスからみたり、上野や浅草で東京の雰囲気を肌で感じる事ができ、「都会」がどういう所なのかというのを学ぶことができた。

(男子)

まず飛行機からの景色がとてもきれいで、カメラでたくさん写真を撮ることができました。サービスのスープもおいしかったです。長野では、あんなに雪に囲まれたのは初めてで、空気が澄みきっていてびっくりしました。スキーもうまく滑ることができ、楽しかったです。

ディズニーランドはパレードやショーが物語になっていてきれいな写真を撮ることができ、家族に自慢しました。お土産も喜んでもらうことができ、また行きたいと思いました。浅草や上野は人が優しく、おかきのお店の人と仲良くなることができました。食べ歩きも楽しく忘れられない最高の思い出になりました。

(女子)

九州を初めて出てわくわくした。初めて飛行機に乗って怖かったけれど、楽しく過ごすできた。バスではカラオケでみんなで歌ったり話をしたりして楽しかった。ホテルでは怖い話をしたり、人狼ゲームをしたりしてしたりして楽しかった。

長野ではスキーはできなかったけど、善光寺に行ったりソリを滑ったりできたので良かった。今度行くときはスキーをしたいと思った。

東京では生のスカイツリーや東京タワーをみて迫力があるなど感じた。

ディズニーシーではアトラクションに乗ったり、見て回ったりできて楽しかった。

浅草では雷門、上野ではパンダを初めて見ることができた。

初めての経験が多くとても楽しかった。

(男子)

硯川ホテルで旅行会社の方が打ち合わせをしているのをみて、私たちが安全に楽しめているのは一生懸命、しかも全力で支えてくださっている人がいるからなんだなぁと思いました。

(女子)

修学旅行全体を振り返ってどうでしたか。当てはまるものを1つ選んで、○で囲みなさい。

すごくよかった

よかった

あまりよくなかった

悪い

はじめに

本校美術科では、フランスへの海外研修旅行が3年間の中で最も大きな行事であり、1年時から準備を行ってきた。2年生になると、西洋美術史の授業の中でフランスの芸術について学び、個人研究も行った。NHK テレビの「フランス語講座」も13回視聴し、語学と文化の認識を深めた。総合的な学習では、フランスについての政治、経済、文化や日本との関わりなどについての調べ学習をした。また、フランス郊外のグレー＝シュル＝ロワン市を訪ね、交流をするため事前に作品を送ったり、黒田清輝について学んだりした。そのため、単なる観光旅行でなく、授業の延長であり、研究の成果の確認といった意味もある重要な旅行であった。



生徒たちは将来何らかの形で美術に関わる仕事をしたいと考えており、そのために直接フランスの文化に触れることは大変意義のある行事である。たった5日間では見て回るにしても限りがあるものの、できるだけ広く見聞を深めるため、ハードなスケジュールとなった。未消化の部分もたくさん残ったが、いつか再訪する機会が来るということを前提に考えた行程である。

日程と共に振り返りながら

【12月4日(月)】 1日目 鹿児島空港集合・結団式 東京へ

6:30 集合予定時間までに全員時間どおり集まった。羽田空港到着後、国際線へ移動。出国手続きを済ませ機内へ。JALの機内は満席で、我々は一番後ろの席にまとまって座ることができた。シャルル・ド・ゴール空港までの12時間半はそれぞれに映画やゲームなど楽しみながら過ごしていた。

フランス到着。まず、時計を8時間戻す。

ほとんどの生徒にとって初めての海外。外国人の係員、アルファベットの表示などにとまどい、きょろきょろしながら入国審査へ。ここで早速「ボンジュール」「メルシー」等のフランス語デビュー。フランスで挨拶すると逆に「ありがとう」と日本語で返された生徒もいた。入国手続き後、バス乗り場へ向かった。生徒はバスが出発した瞬間から窓にはり付き、シャッターを押しまくっていた。街並み、建物、看板など何もかもが新鮮で驚きだったようだった。

● エッフェル塔

パリ市内に入ると、まずはコンコルド広場に出て、クリスマスのイルミネーションが輝くシャンゼリゼ通りを通る。白亜の建物「シャイヨー宮」が見え、その後ろにライトアップされたエッフェル塔が現れると、車内に歓声が上がった。1889年に建てられた当時、フランスにいた黒田清輝は「巨大な火の見櫓のようなもの」と手紙に書いており、324mの鉄でできた塔は、現在パリで最も有名なスポットである。バスを降りエッフェル塔を背景に記念撮影。その後、添乗員の配慮でマルス広場まで移動し、10分後に始まるのシャンパンフラッシュまで待機。7時き

っかりに点滅が始まり、生徒たちは皆一斉に撮影、感動のひとときを過ごすことができた。パリの空の下、電飾が輝くエッフェル塔の姿はきっと生涯忘れられないパリの第一印象となるであろう。バスに乗り、「メルキュール・ポルテ・デ・ヴェルサイルス・エキスポホテル」へ到着。広いロビーのある豪華なホテルに驚いた様子。

チェックインした後それぞれ部屋へ戻っていった。その後班長会を開き、本日の反省と明日の確認を行い、就寝。



【12月5日(火)】 2日目・曇り

6:30の朝食、8:00の集合。寝坊した生徒もいたが、ほぼ時間通りに出発。本日は2万歩を超える距離を歩く予定。本日からシル弘子さんがガイドとして案内して下さることになっている。

● ノートルダム寺院

セーヌ川沿いをバスは進み、ナポレオン三世期に建設された豪華なパリ市庁舎前でバスを降りた。

シテ島にある“ノートルダム寺院”まで歩いて移動。「白い貴婦人」と称され、ゴシック建築の極みともいえる荘厳な教会を見学した。バラ窓の美しさに見とれ、壁画や彫刻そして祭壇のすばらしさに圧倒されていた。今の時期はクリスマス前ということもあり、キリストに関するエピソードをミニチュアで表した展示も見ることができた。

その後、記念写真の撮影やスケッチを行った。サント・シャペル、コンシェルジュリの横を抜け、ポン・ヌフ橋を渡り、オルセー美術館まで歩いて移動。街並み、セーヌ川などいかにもパリらしい景観にシャッターを切り、スケッチも楽しんでいた。

● オルセー美術館

オルセー美術館は、19世紀の名作が並び、特に印象派の画家たちの作品が展示されている人気の美術館である。キュレーター（美術館学芸員）が、見せる側の立場でテーマ性を持ち構成した主張ある展示となっている。3年前はリニューアルしたばかりで、紺色の壁に驚かされたが、今回の展示は、そのときと配列が変わっていた。よかったことは、今回は撮影がOKだったこと。

まず、入り口に立ち全体を見回す。元々駅舎だったものを、美術館に改装したとのことで、開放的で中心に並べられた彫刻群が俯瞰できて壮大な眺めだ。ここから、ガイドの黒川さんが加わり、二手に分かれてガイドさんの説明を聞きながら回った。プロのガイドの説明は素晴らしく、より深く鑑賞することができた。いきなりミレーの《落ち穂拾い》と対面。《晩鐘》は貸し出し中とのことで残念ながら見ることはできなかった。その他、ゴッホ、ゴーギャン、ルノアール、セザンヌ等々、印象派の画家たちの名作が次々に登場。特にルノワールの《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》は、モンマルトルで描かれた場所を見ることになるので楽しみだ。自由観覧時間もあったが、それでも「もっと時間がほしい」といいながら後にしていた。

● シャンゼリゼ通り散策

バスで“凱旋門”へ移動。世界で最も美しいといわれるシャンゼリゼ大通りを、みんなで一緒に1キロ近く歩いた。途中には、ヴィトンの本店、フーケッツなどのカフェ、フランス自動車メーカーのショールームなど、魅力的な店が建ち並んでいたが、生徒のほとんどは「モノプリ」（食料品から雑貨まで揃うスーパーマーケット）でのショッピングで時間をつかってしまった。途中、



移民の子供たちや、集団のスリグループなども発見することができた。

バスで南へ向かう。途中車窓からモディリアーニなどが暮らしたモンパルナスの街並みを見学した。

● ピカソ美術館

マレ地区にたたずむ17世紀の館を改造した建物で、ピカソだけでなく、ピカソがコレクションをしていたマティスやモディリアーニも見ることができた。今回は、特別展を開催しており、一時期に制作されたピカソの作品にスポットを当てたもので、いかに発想が豊かで、変化に富んだ作品であるかを見ることができた。

● ブールデル美術館

旅程の中に「モンパルナス散策」とあったので、それならばと「ブールデル美術館」見学を入れた。ロダンの弟子でもあったブールデルの住まいを美術館に改装したもので、生活空間もアトリエもほとんど当時のままに見ることができる。代表作《弓を引く男》や鹿児島市立美術館にある《サッフォー》をはじめ巨大な石膏原型像を多数見ることができた。

再びバスにのり、モンパルナスの街を抜ける。レストランに魚介類が並び実においしそう。今夜の食事に期待が膨らむ。



● グランショミエール美術学校

今回の最も大切な目的の1つである“グランショミエール美術学校でのデッサン教室”。ニコラ先生の熱い指導の下、若いフランス女性のヌードを描くのだが、まずは、モデルのファニーさんがいろいろなポーズをとって、体の構造、筋肉の作りや動きなど、すべてを惜しみなく見せてくれた。生徒たちはモデルさんの本気度に圧倒され、感謝の気持ちも込めて、熱心にクロッキーを重ねた。おかげで緊張感のある時間を過ごすことができた。ニコラ先生もモデルさんも、生徒のクロッキーのできの良さに感心していた。最後、全員で撮った記念撮影にはモデルさんのファニーさんも入って、いい雰囲気で行われることができた。ファニーさんからは「素晴らしい生徒ですね、将来を期待している」との言葉をいただいた。涙が出そうなくらいうれしかった。

● 夕食 ついに「鴨のコンフィ」

生徒は、NHKの「フランス講座」で、「鴨のコンフィ」を食べ歩くという特集があったので、是非実現したかったのだ。

バスターミナル広場近くのレストランで夕食となった。かなり大きい鴨肉の足の部分をオリーブ油で揚げた料理で、こってりとして量も多かった。デザートもおいしく生徒は喜んで食べていた。



バスに乗り、ホテルへ到着。疲れているので、そのまま班長会を開き、本日の反省と明日の確認を行い、就寝。

【12月6日(水)】 3日目・・小雨

● モンマルトル

モンマルトルは、見所が多く、全員一緒にガイドさんについて見学することになっている。坂が多く、見所もたくさんなので、70歳を越えたガイドのジル弘子さんには、大変だと思ったが、

どうしてどうしてあまりの元気さに、我々の方がついて行くのが大変だった。

「ムーラン・ルーシュ」の近くでバスを降り、坂を上っていくと“ゴッホの暮らしたアパート”，“ピカソやルノワール，モディニアーニの暮らしたアトリエ洗濯船”，“ルノアールやロートレックの描いた《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》跡地の風車小屋”，多くの画家が描いた街並みや建物など効率的に全て回ることができた。“ラパン・アジル（ユトリロなどが描いたレストラン今も当時のまま）”の前まで行き引き返す。その後，“テアトル広場”で，似顔絵描きたちを見たりして，“サクレクール寺院”に入る。荘厳な雰囲気の中，天井画などに見とれる。天井画の中には花魁も描かれていた。前の広場はパリで最も高い位置にあるので，眺めは最高。記念撮影とスケッチなどをした後，スタンケルク通りを降りていった。途中，スリやアンケート詐欺などとも出会ったが，皆うまく断っていた。

● ルーブル美術館

いよいよルーブル美術館。期待で胸が膨らむ。どこの美術館でも，機械に手荷物を預けたり，バッグを開いて中身を見せることになっていたが，生徒たちの中には，わざわざバックからカッターナイフを取り出して別に機械に通す者がいた。「危険物を持っているか」の検査なので，捕まりはしなかったが冷や冷やものだった。こういう時，美術科生の引率は大変だ。後から注意することだった。

記念撮影の後，二手に分かれての見学となった。実は，この旅行の前にモワン又前田さんという鹿児島出身のコンフェランシエ（美術館専門のガイド）をされている方に，松陽高校で特別講義をしていただいていた。「あなたが作品の前に立ち止まったのではなく，作品があなたを捕まえたのです」とその時話された言葉を胸にいよいよルーブル美術館デビューとなった。まずは，ルーブルのスケールに驚かされて，きょろきょろして回る。いきなり《サモトラケのニケ》前に出てシャッターを切りまくる。その後《ビーナス》の横を抜け，イタリア絵画。ラファエロ，ミケランジェロ，レオナルド・ダ・ビンチ・・・そしてついに《モナリザ》。その後《民衆を率いる自由の女神》，《メデューズ号の筏》，《オダリスク》，《ナポレオンの戴冠とジョセフィーヌの戴冠》等々あまりにも有名すぎるあこがれのフランス絵画が次々に現れる。現実に目の前に現れていることさえ，非現実的で，夢の中で起きているような感覚で至福の時間を過ごすことだった。時間的には全く足りない。なかには昼食をとる時間も惜しんで見学していた生徒もいた。生徒たちは，もう1度最終日のチャンスにかけようと思っていたようだ。

● ポンピドーセンター

バスでポンピドーセンターに移動。ここは20世紀以降の現代芸術を展示している施設。鉄骨，配管，エスカレーターがむき出しになった斬新な建築に目を見張る。エスカレーターで4階まで昇り，二手に分かれてガイドをしていただく。その後は各自で自由に鑑賞した。生徒はそれぞれのペースで回っていた。難解な現代アートではあったが感想を聞くと皆一同に「すごくよかった」と答えていた。

● オランジュリー美術館

モネの「睡蓮の間」を訪れることを楽しみにしている生徒が多かったが，ついに叶ったということだ。自然光が降り注ぐ楕円形の大きな部屋の壁一面に睡蓮の連作が描かれている。視線はだんだんと水面に移り，そこには睡蓮だけが描かれているという幻想的な部屋が2つあり，回りながら見る者，真ん中のソファに座って見る者など，それぞれの楽しみ方で鑑賞していた。睡蓮の池の中に自分が居るような不思議な感覚になった。地下にはルノアールやピカソを始め多くの画家たちの作品，しかも代表作などが多数あって大変よかった。

● オペラ座周辺散策

バスでジュンク堂などの日本食が立ち並ぶ一角を抜け、“オペラ座”で降りる。目の前が「ユニクロ」でこの入り口が集合場所となった。ここはパリ有数のデパート群が立ち並ぶところ。わざわざこのデパートでのショッピングのために、日本からのツアーが組まれるほどで、特にこの時期のショーウィンドの飾り付けはすばらしい。それぞれのシューケースごとにテーマがあり、音楽が流れる中操り人形が動き、小さな子供から大人まで大いに楽しめる内容となっていた。後日、NHKでパリの「ショーウィンドの飾り」について特集が組まれていたが、美術科として是非生徒に見せたい現代のパリのデザインでありファッションであった。周辺はクリスマスのイルミネーションが美しく、その中を歩いている自分に感動であった。また、“ラファイエット”や“プランタン”といったデパートをそれぞれに見学して回った。感動の余韻の中ホテルへ。



この日も班長会を行った。夕食のあと就寝。

【12月7日(木)】4日目・雨

チェックアウトの後、一路南へ。パリの南約64キロのグレー＝シュル＝ロワンに向かう。あいにくの雨模様。渋滞で混み合うパリを抜けると徐々に車も少なくなり快適なドライブとなる。また、風景も都会から田舎のそれに変わり、広々とした畑が見えてくる。ヨーロッパらしい深い森を抜けてグレー＝シュル＝ロワンに到着。

● グレー＝シュル＝ロワン

橋の手前で降りた後、小雨の下ロワン川のためとまで歩き写真撮影した後スケッチ。ゆったりとした流れのロワン川にはたくさんの白鳥や鴨がいて、古い城壁や、12世紀に作られた石橋など素晴らしい中世を思わせる風景に浸っていた。ただ、足下には無数の鴨の糞が落ちており、生徒は「ギャーギャー」叫びながら歩き回っていた。美しい風景の中に、わめき回る日本の女子高生というシュールな光景であった。



町役場に到着。マリエ・ニコラス副市長と、クリストファー・リゲールさんが、出迎えてくれた。公式に連絡を取り合った中での表敬訪問であったが、フランスの新聞記者が取材に来られていた。役場内には、たくさんの絵が飾られ、その中に、今回訪問した生徒38名が描いた絵もあった。その中から子供たちの投票で決まったという3点は額に入れて展示してあった。

まず、副市長の歓迎の挨拶で始まり、本校の内園教頭が挨拶を行ったが、それを2年前からグ

レーに住んでいる荒田光さんが通訳してくださった。副市長から内園教頭に感謝状と記念のメダルが贈られた。これまで松陽高校の生徒が3回訪問し、そのたびに作品を寄贈してくれた感謝の意味が込められているとのことであった。また、私は新作の油画をグレーに寄贈した。それで作品のお礼と、これまでの生徒を伴っての訪問に対しての感謝状とメダルをいただいた。記念撮影をした後、しばらく作品を眺めたり、歓談をした後役場を後にした。

その後【黒田清輝通り】まで歩いて移動した。記念プレート前で、写真撮影を行った。実はこの通りができたことにも私に関係していた。西暦2000年当時南日本海外留学生として滞在していた私は、モワンヌ前田さんから「グレーで開催された展覧会」に誘われたことがきっかけで、グレーの人々と共に黒田の借りていた納屋のあった場所を調査し、黒田の日記と、1894年の住民台帳・土地台帳を基に当時の下宿先をほぼ特定した。その関係で2001年10月17日「黒田清輝通り」が誕生したのである。このプレートの「黒田清輝通り」という文字は当時の須賀龍郎鹿児島県知事が書き、村の彫刻家が石版に掘り、東京文化財研究所が所蔵している自画像を転写したもの。実は2000年は生徒たちが生まれた年でもある。あれから17年。担任している生徒と一緒にこの地を訪れようとは。しかも今回で3回目である。・・・感慨ひとしおであった。

● シュビオンホテル

南日本美術展で、吉井賞を受賞した吉村氏がこのホテルに滞在していた。ここは黒田清輝も1890年に滞在したホテルで《読書》もここで描かれた。館長や吉村氏の話をついたあと、借りている部屋や、アトリエを見せていただいた。そこには吉村氏の描いた多くのスケッチと制作中の油画があった。これもまた、生徒にとっていい経験になったと思う。館長から生徒たちへ「将来、是非滞在してほしい」との声をかけていただいた。お礼を述べ会場を後にした。

● ミレーとルソーのお墓参り

雨が降る中、シャイイ＝アン＝ピエールにあるミレーのお墓に行った。同じバルビゾン派のルソーと隣どおしに建っていた。ミレーのお墓はコンクリートで作られ、ルソーは自然石を積み上げたものでみんなで手を合わせた。あの有名なミレーがここに眠っていると思うと不思議な感じがした。

● 昼食

この旅で最も盛り上がったかもしれない。食事もおいしかったが、ギャルソンのお兄さんがイケメンで、近くに来るとキャーキャー大騒ぎ。結局女子だけでなく男子までもが一緒に写真を撮って喜んでいた。

● バルビゾン

バスに乗車しフォンテーヌ・ブローを通り一路バルビゾンを目指した。19世紀の中頃、素朴な農村風景に魅了された画家たちが住みついた村であり、ミレーもその中の一人である。途中《晩鐘》の絵に小さく描かれている“教会”を見ながら一路バルビゾンへ入る。現在はパリ郊外の高級別荘地になっており、観光地としても栄えている。かつて昭和天皇が食事したというレストランには「裕仁の間」もあるという。土産物屋、レストラン、アートギャラリーといった雰囲気のある通りを歩いてミレーのアトリエに向かった。

● ミレーのアトリエ（ミレー美術館）

ミレーが家族とともに暮らした住居兼アトリエである。ここは1881年に黒田清輝が訪問した記録が残っている。つまり、136年後に郷土の先輩が訪れた地に立っているということになる。特別に撮影許可もいただき《晩鐘》の描かれた場所、モデルの立っていた場所を写真に収めていた。絵はがきやポスターを購入する生徒も多かった。「日本でも手に入るのに」というと、



「ミレーの暮らしたアトリエで買うということは全く意味が異なってくる」との返事。きっと一生の宝物になるんだろうと思うことだった。

帰りはバルビゾンの森の中まで足を伸ばしミレーとルソーが埋め込まれたレリーフも見学した。

● フォンテーヌ・ブロー

フランスでは珍しく土砂降りの中、添乗員の配慮で、特別にモノプリにてショッピングの時間をたっぷりとってもらった。それぞれにお土産やおやつなど購入していた。フランスで暮らす人々の日常に触れた感じだった。みんな「ボンジュール」「メルシー、オーバー」と会話しながら買い物を楽しんでいた。

● ホテル

パリと同じメルキュール系列のホテル。ここもすばらしいホテルであった。

室内は広く明るく、風呂は大理石であった。アメニティグッズも充実しており、おかげで生徒は大喜びであった。

夕食は「これぞフランス料理！」といった雰囲気と内容で、生バンドの演奏もあり、演奏にもみなノリノリで喜んでいて、生徒にとって大満足のフォンテーヌ・ブローの夜だった。

【12月8日(金)】 5日目 晴天【最終日】

時間通り出発。本日は終日バスでの移動になる。

● フォンテーヌ・ブロー城

世界遺産にも登録されているフォンテーヌ・ブロー城見学。この旅程で初めての雲一つない快晴。開園時間まで記念撮影などして過ごし入場。ここでも二人のガイドさんに案内していただいた。フランスにおけるルネッサンス期の様式が残り、かつてレオナルド・ダ・ビンチも滞在していたという宮殿。《モナ・リザ》も一時期ここにあったという。また、ナポレオンも亡命生活をしたことのある宮殿で、広大な庭と共に見所が多かった。生徒は、ここではゆっくりと過ごすことができ、スケッチをする時間もとることができた。



● 再び ルーブル美術館へ

食事をとるために、設定したのがルーブル美術館のフードコート。一時間半の昼食時間という設定だったが、やっぱりというか当然というか。それぞれに、食事をとらずに美術館に散っていた。前回見られなかった、エジプトやメソポタミア関連、それに北方の絵画などを自分の足で見て回っていた。後から尋ねると、「ハムラビ法典」を見た者、ラ・トゥールを見た者、あるいは再度ニケやビーナスを見に行った者などそれぞれに楽しんでいた。また、もう一つの大切な目的であるルーブル美術館でのショッピング。ここでしか買うことに出来ないグッズや画集など購入していた。ちなみに食事は、ほとんどの生徒がバスの中でとっていた。それでも、「時間が全然足りない」との声があがった。



● フォンダシオン・ルイ・ヴィトン美術館

4年前、あのルイ・ヴィトンがパリ郊外のブローニュの森に美術館を作った。フランク・ゲー

リー設計の木材とガラスを多用した斬新なデザインに圧倒。今回はニューヨークの「近代美術館 MOMA」の作品展をしていた。ウォーホールやデ・クーニングなどの、近現代の超有名作家の代表作が展示されていた。パリに来てニューヨークに触れられた感動があり、生徒によっては「ここが一番感動した」と言っていた者もいた。土産物店のグッズはすべて「LA FONDATION LOUIS VUITTON」というロゴが入っていた。トートバッグが1600円。残念ながら売り切れであった。

空港へ

手続きの後、最後のショッピングを楽しみ JAL 機内へ。帰りの便も満席であった。

【12月9日(土)】 6日目

帰りは早く感じられトラブルもなく羽田空港到着。全員の無事を喜び合った。帰国手続きも問題なく終わり、バスで羽田空港へ。

鹿児島空港到着。たくさんの保護者のお迎えの中、解散式。山田島教頭先生は「お帰りなさい」の横断幕まで準備し出迎えに来られ挨拶をしてくださった。

おわりに

生徒は初めて、私にとっては3回目の「海外研修旅行」であった。

とにかく中身の濃い充実した研修となった。2年近くかけて準備をし、フランス語会話から、フランスの政治・文化・地理、美術館の調査、作家研究等々調べつつ、この海外研修旅行に向けての思いを膨らませてきた。

旅行中の生徒の態度もすばらしかった。総務・副総務を中心に毎日班長会を開き、その日の反省をしっかりと行い、翌日の予定を確認し連絡が徹底されたおかげで、自ら考え行動する態度が育っていった。これは事前学習から係り分担、班分け、部屋割り全てが生徒の手によって行われた結果であり、普段の学級活動の延長であったともいえる。ある生徒が「水槽の中の出来事を上から俯瞰しているような感覚があり、現実として起こっているようには思えなかった」と反省に書いていたが、まさにそんな感覚だと感じた。生徒は、パリから保護者宛にはがきを出していた。保護者の中には、わざわざその感動を伝えてきてくださった方がおられた。生徒の反省にも、「旅の途中、こんな機会を与えてくれた親に感謝の思いで涙が出てきた」とあった。ある意味、親子の絆を感じる旅であったのかもしれない。

また、私にとって16年前の黒田清輝通り誕生から今日まで、黒田の導きであるかのような不思議な巡り合わせでこの旅行を迎えた。次世代に続く新たな芽が植えられたと感じた。今後この芽が大きく育ち一人前の芸術家となってフランスと日本の架け橋になって欲しいと感じた。改めてこのようなきっかけを作ってくれた郷土の偉大な画家黒田清輝と、現在も鹿児島とグレーのために架け橋となっているモワン又前田恵美子様に関心から感謝したい。そしてここまで至った松陽高校海外研修旅行の歴史と、学校の体勢、保護者の理解と支援に対し感謝したい。

願わくば、世界中の人々がお互いの人種・民俗・宗教・政治などを尊重し合い、慈しみ合う平和な世の中になってほしいと思う。

平成29年度 美術科1年 風景画合宿研修実施報告

美術科 餅原 宣久



■実施要項

1 目的 学校を離れ、広く自然の素材を活用し風景画制作を体験して写生による表現の能力を高めるとともに、美術科生としての意識の高揚を図る。

2 日時 平成29年7月26日(水)～7月28日(金) 2泊3日

3 場所 日置市吹上

制作～薩摩湖周辺および「吹上温泉と歴史ゾーン」

①正円池周辺 ②海浜エリア ③吹上温泉街 ④大汝車遅

神社

周辺

宿泊～吹上砂丘荘

4 日程 (現地までの移動は貸し切りバス)

○7月26日(水)

8:20 学校集合 準備

8:40 松陽高校バス発

9:30 吹上着



バスで①正円池周辺②海浜エリア③吹上温泉街④大汝車遅

社周辺と下見

※制作場所の決定、集合・トイレ・昼食場所の確認 周辺の

散策

11:00 吹上砂丘荘着

荷物整理、スケッチ準備 ※自分の制作場所を担当に届ける。昼食(持参の弁当)

12:30 事前説明 移動(吹上砂丘荘周辺以外はバス) スケッチ、下描き

15:30 制作終了

15:45 集合・移動 アトリエ見学(大寺先生宅) 宿到着後入室・荷物整理 入浴

18:30 夕食 20:00 事前学習(下描きの講評) 22:30 就寝

○7月27日(木)

6:30 起床 7:00 朝食 スケッチ準備

8:30 集合・諸注意 8:45 移動(吹上砂丘荘周辺以外はバス)

9:00 制作開始

12:00 昼食(注文した弁当)

16:30 制作終了

16:45 集合・移動 宿到着後入室・荷物整理 入浴

18:30 夕食 20:00 講評会・交流会 22:30 就寝

○7月28日(金)

7:00 起床 7:30 朝食・片づけ 8:30 清掃・後始末

9:20 出発

10:00 美山着「荒木陶芸」見学 11:00 「荒木陶芸」発

11:30 松陽高校着 12:10 鹿児島中央駅 解散

5 参加者 美術科1年生 男子8名 女子35名 計33名(女子1名不参加)

6 引率 餅原宣久(担任/美術科)、赤木香織(副担任/国語科)、加治大樹(副担任/地歴科)
前村卓臣(美術科)、上木原堅一(美術科)

7 経 費 生徒一人あたりの経費 13,000 円 (材料代・宿泊代・食事代～二日目の昼食)

8 持参する物 水筒, バスタオル, 洗面用具, 着替え, 寝間着, つば広帽子, 長袖服, 雨具, 常備薬, 画材 (油彩道具, スケッチブック, 鉛筆, 木炭, キャンパス, 野外イーゼル, クロッキー帳, 制作ノート等), 医療箱

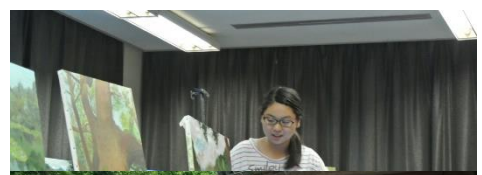
■合宿と振り返って

本行事は、毎年7月末から8月初めにかけて二泊三日で行われる美術科恒例の行事である。高校生になり「美術科」というこれまでと異なる環境の中、初めての体験の連続で過ごしてきた1年生がようやく1学期を終え、真夏の炎天下の下、集中して制作を行う機会である。美術科1期生から5期生までは飢島(5期生は台風で中止)、6期生から12期生までは長島、13期生から16期生までは南九州市顛娃と場所を変えて行って来た。当初行っていた公民館で宿泊まりし、協力して自炊を行うスタイルもひとつの伝統であったが、調理や入浴にかかる時間や労力、食中毒等の衛生面についての危惧などを鑑み、平成23年度の17期生から日置市吹上の宿泊施設を利用しての合宿とした。本年度で7回目となりそのスタイルがすっかり定着しつつある。

過去6回の合宿を行ってきた地ではあるが、生徒の安全面を最優先に考え、下見と打ち合わせを2回、入念に行った。宿泊場所の「吹上砂丘荘」においても食事や入浴は勿論のこと、制作地までのバスでの送迎など、これまでの経験を生かして快適な研修環境への協力があった。生徒たちには事前学習会を行い、合宿地についての予備知識をつけ、制作へのイメージを膨らませた。

合宿の3日間は終始充実した活動を行うことができたが、2日目夕方に降雨に見舞われ、現場での制作を短縮せざるを得なかったことが唯一残念であった、生徒達は積極的にのびのびとした制作を行い、まだまだ制作経験の少ない現時点においては高いレベルの作品を仕上げることができた。作品の出来不出来はさることながら、暑さに耐えながら制作に集中し、自分なりの画面を完成させる満足感を得られたことで、美術科生としての今後の生活に生きてくる精神面の収穫がたいへん大きかったように思う。また、寝泊りを共にすることで学級の結束もさらに固めることができた。終始前向きな明るさを感じながら過ごすことができた3日間から、この集団への期待が大きく膨らんだ。

今回の合宿には美術科非常勤の塩津先生、荒木先生、浜地先生、大寺先生、石神先生も途中から参加して下さり、夜の講評会でも貴重なご指導をいただいた。また、合宿途中に町内にある大寺先生のアトリエ、帰校する途中には「荒木陶芸」を見学させていただき、制作現場を直接目にしながら日常の制作活動についてのお話を伺うことができた。このように多くの皆様のご協力をいただきながら行った本年度の風景画合宿は成功裏に終わり、美術科23期生の胸にいつまでも思い出として残っていくような機会になったように思う。



平成 29 年度 英語コースサマーセミナー (English Course Summer Seminar)

教諭(英語科) 内山 健一

1 はじめに

本校英語コースは外国の歴史・文化・社会・政治などを理解し、豊かな国際感覚と語学力・コミュニケーション能力を高めることを目標としている。その学習の一環として、毎年2年生を対象に行っているのがサマーセミナー(英語宿泊学習)である。今回で 29 回目となるサマーセミナーについて報告する。

2 平成 29 年度英語コース語学研修実施計画の概要

(1) 目的

(ア)集中講座による密度の濃い学習を通して、英語についての理解を深めるとともに、英語学習への意欲を高める。

(イ)少人数制のグループ学習により、特に英語のリスニング・スピーキングの能力及び表現力の伸長を図る。

(ウ)外国人講師と起居を共にすることで、英語のみを用いる生活環境を設定し、英語に慣れ親しむとともに、国際的感覚を養う。

(2) 内容

(ア)講座制によるグループ学習と全体学習

(イ)スピーチ、プレゼンテーション

(ウ)レクリエーション

(3) 対象者:2年生英語コース生(24名)・1年生(2名) 計26名

(4) 期日:平成29年7月27日(木)~7月29日(土)(2泊3日)

(5) 場所:霧島自然ふれあいセンター(霧島市牧園町高千穂3617-1)

(6) 経費:生徒1人当たり(2泊3日) 4,000円

内訳:シーツ代 100円 / 食事代3,500円 / 予備費400円

※交通費は本校が負担

(7) 服装:夏季制服, 正課体育服(ジャージ上下), 動きやすい服装, 運動靴

(8) 引率者・講師

英語科職員: 内山 健一, 中島真理子, 赤池 信一, 益満 淳一

ALT Samantha Johnson

Charis Tarbett

Christine Zawlock

Tiffany Cole-Stitt

松陽高等学校

鹿児島中央高等学校

鹿屋高等学校

伊集院高等学校



3 日程及び活動内容

期日	時刻	研修内容
7月27日(木)	10:30	・ ALT, JTE打ち合わせ
	11:30	・ 自己紹介等, 研修1 於:LL教室
	12:00	・ 昼食
	12:45	・ バスへ移動, 出席者確認後, 霧島自然ふれあいセンターへ出発
	14:30	・ センター着, 研修2(スピーチの実例を観る)
	15:00	・ 開会行事 開会の言葉/諸注意
	15:30	・ 研修3(スピーチ練習 ① Ice-breakers ①)
	18:00	・ 夕食
	19:00	・ 入浴時間(19:00~20:00)
	20:00	・ 研修4(スピーチ練習 ②)
	21:00	・ 研修5(Song Activity ①)
	22:30	・ 就寝
7月28日(金)	6:30	・ 起床・洗面
	7:00	・ 朝の集い・清掃
	8:00	・ 朝食
	9:00	・ 研修6(全員によるスピーチ発表) *全体代表3名決定
	12:00	・ 昼食
	13:00	・ レクリエーション センター発→霧島神話の里公園 (雨天時:エコミュージアムセンター)
	16:00	・ 霧島神話の里公園→センター着
	17:00	・ 研修7(プレゼンテーション ①)
	18:00	・ 夕食
	18:30	・ 入浴時間(18:30~19:30)
	20:00	・ 研修8(プレゼンテーション ②)
	21:00	・ 研修9(Song Activity ②)
22:30	・ 就寝	
7月29日(土)	6:30	・ 起床・洗面
	7:00	・ 朝の集い・清掃
	8:00	・ 朝食
	9:00	・ 研修10(Song Activity ③, Ice-breakers ②③)
	11:00	・ 反省・感想記入
	12:00	・ 昼食
	12:45	・ 研修11(プレゼンテーション発表等)
	13:15	・ 閉会行事
	13:30	・ 霧島自然ふれあいセンター出発
	15:00	・ 鹿児島中央駅着・解散

4 主な研修内容について

(1) Ice Breaking活動

Ice Breakingとは初対面の人同士が出会うとき、緊張を解きほぐすための活動である。本校生徒にとっては初対面になる外国人講師 3 人がプロジェクターを使って自己紹介を行った。次に生徒たちは 6 人編成の4グループに分かれてグループごとに英語で自己紹介した。この時のグループに外国人講師 1 名と本校英語科職員 1 名がつき、その後の活動を指導することになる。一緒に昼食をとり、緊張も解けて和やかなムードの中でセミナーが始まった。

(2) スピーチ

今年のサマーセミナーのメインとなる活動である。2 日目の発表会で上位 3 名が選出されて校内スピーチコンテスト出場することになっている。まず2014年にノーベル平和賞受賞したマララ・ユスフザイさんの感動的なスピーチを見た後、外国人講師からスピーチのポイントを指導してもらった。次に自分のスピーチ原稿を読む練習である。ここで外国人講師による音声面の個人レッスン。



自分の発音をネイティブスピーカーの発音に近づける減多にない機会である。その後ひたすら個人練習に励み、翌日の発表会を迎えた。発表会では「友人」「幸せについて」「世界の中の日本人」「留学で学んだこと」「自分らしさ」など自分の思いを英語で一生懸命伝えようとする生徒の姿が見られた。音声面はもちろん表情やジェスチャーなど表現力の向上にもつながるよい活動となった。

(3) プレゼンテーション

「TPPの導入によって鹿児島が直面する問題にどう対処するか」というテーマでプレゼンテーションの練習を行った。8月に行われる校内スキット・弁論大会で発表することを目標に、1人1人が与えられたパートの練習に取り組んだ。最初は棒読みで原稿から目を離せなかった生徒たちだったが、個人練習と全体での通し稽古を繰り返す内に、観客にアピールしようという姿勢が見られるようになり、かなりの上達が見られるようになった。



(4)レクリエーション



毎年、レクリエーションとして「えびの高原池めぐり」を行っている。しかし、今年は霧島の火山活動が活発で、池巡りのコースにある硫黄山も噴火の恐れがあるため、大事をとって「霧島神話の里公園」に変更することにした。霧島の清々しい空気や眺望を満喫してもらうつもりが、あいにくの悪天候。土砂降りにあって公

園内の休憩所で立ち往生するグループもあった。そんな中でも生徒たちは外国人講師との会話を楽しんでいただけた。

5 おわりに

サマーセミナーは英語コース2年生にとって一大行事である。準備段階ではスピーチのテーマに頭を悩ませ、辞書を引きながら英訳しては添削を受け、パソコンに向かう。セミナー当日には外国人講師に言いたいことが伝わらないもどかしさを感じ、日本語にない英語独特の発音やリズム、表現の仕方を学ぶ。練習を重ねることで次第に英語のスピーチやプレゼンテーションらしくなっていく過程を見ていると、このセミナーを29年続けている意義がわかったような気がした。そしてその成果が後に行われた鹿児島県英語スピーチコンテストや鹿児島純心女子大学英語スキットコンテストでの入賞につながったのではないだろうか。

また、本セミナーで得られたものは英語学習の成果だけではない。寝食をともにし、朝早くから浴場の清掃などを協力して行ううちに、英語コース生としての連帯感が育まれたように思う。これからの活動の弾みになることだろう。



閉校式で生徒たちは外国人講師から「サマーセミナー修了書」と参加賞のクリアファイルを受け取った。クリアファイルには外国人講師が1人1人に心のこもったメッセージを書いてくれていた。英語学習への意欲を喚起したに違いない。英語コース生の更なる飛躍に期待したい。

平成29年度校内研究授業・研究発表の記録

番号	氏名	期日	学級	科目	単元名	研究授業名
1	福田真望	10月 24日	3年7組	倫理	人間としての在り方生き方	高校教育課訪問
2	須貝佳奈子	10月 24日	2年体育 コース	スポーツⅡ	ゴール型球技（バスケットボール）の理解と実践	高校教育課訪問
3	岡留幸恵	11月 2日	2年文科 コース	国語表現	小論文入門（3）－資料を読み取って書く－	県総合教育センター －研究提携
4	福田真望	11月 2日	2年8組	政治・ 経済	市場経済の機能と限界－ 織田信長の比叡山焼討を 事例に－	県総合教育センター －研究提携
5	野崎純一・ 徳富寛・ 小宮路浩章	11月 2日	1年5・6 組	数学Ⅰ	データの分析 データの 相関	県総合教育センター －研究提携
6	堀正二	11月 2日	3年5組	化学	金属イオンの分離と確認	県総合教育センター －研究提携
7	立石純也	11月 2日	2年音楽 科	音楽史	西洋音楽史－ウィーン研 修について－	県総合教育センター －研究提携
8	餅原宣久	11月 2日	1年美術 科	素描	何をどう見てどう描くか …!?	県総合教育センター －研究提携
9	内山健一	11月 2日	2年1組	外国語	No More War Tragedy	県総合教育センター －研究提携